331.37
Ta87

始

91-2475
入之
~~102-192~~
331.32
TA87

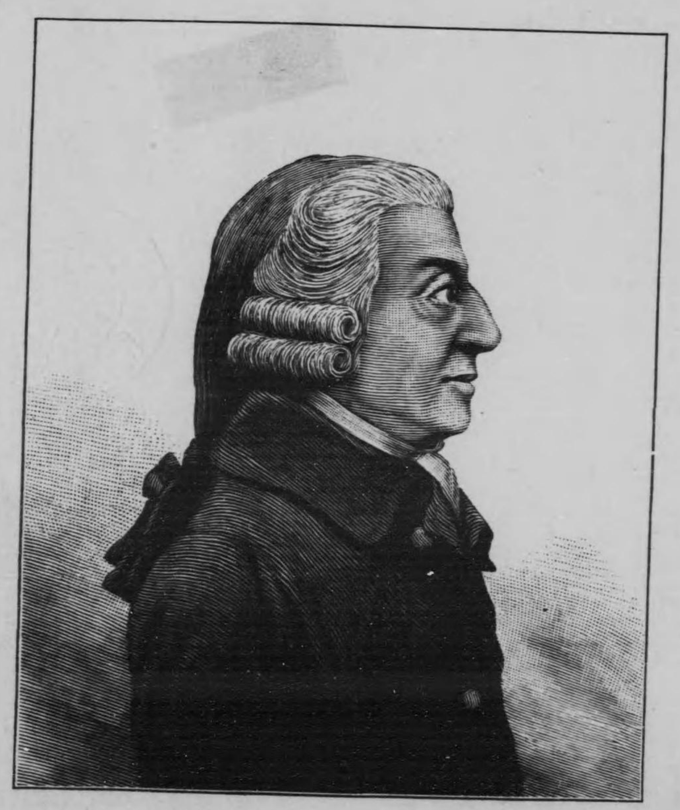
上田貞次郎序
小泉信三序

谷口彌五郎著

アダム・スミスの經濟思想

東京
株式會社
同文館藏版

大正
12. 2. 6
交内



アダム スミス

Adam Smith

(*1723—1790*)

序

谷口君の處女作が世に出づるに當り其序文を書くことは余に取つて極めて愉快な仕事である。余は未だ曾て教壇の上から君を敎へた經歷はないので、唯比較的長く私的交際をして居たといふに過ぎないけれども、併し君が學問上の理論に對して慧敏な感覺を有し、且研究心の頗る強い人だといふことは余の夙くから認めた所であつた。而して特に中學を經て專門學校を卒業するに至るまで裕かならざる經濟の裡に獨立獨行で、而かも普通の青年の能くせざる勤勉を續けた一事に就いて余は常に嘆賞し、其將來に

大なる望を屬しつゝあつた。故に今本書の如き大論文が同君の手に成つたのを見ては、啻に同君の爲めに祝するのみならず、自分としても聊か人を見るの明ありしことを感ずるのである。抑々アダム・スミスの學問は其取扱ふ所の範圍極めて廣く、又其取扱ひ方の極めて深いものがあるので、之を總括して論ずるのは固より大事業である。從つて此一卷が其總てを論じ盡し、而かも論じて些の誤なしとすることは出來ないけれども、大體に於いて彼の生涯と彼の時代を說明し、彼の經濟學史上の地位を傳ふるに足るものであることは疑なからうと思ふ。スミスの誕生二百年の記念すべき日を迎へんとするに當りて此書の出づるは學界の爲めにも亦喜ばねばならぬ。是余が敢て之を江湖に推薦する所以である。

一九二二年十一月十三日

上田貞次郎

序

アダム・スミスの頭腦がその獨創透徹よりも寧ろ其博大に於て秀でたことは、既に定評の存するところであらう。從つてスミスを論ずる場合には、彼れが其前人の誰れより何を受けたかと言ふことが、特に興味ある問題となるやうに思ふ。彼れが佛蘭西フイジオクラアトに如何なるものを負うて居るかの如きも、亦此問題の一に屬するのである。其自然法的根本思想に於て、スミスとフジオクラアトの間に主要なる共通の存する事は明かであるが、併しこれは前者が後者に學んだと云ふよりは、寧ろ兩者が共に同じ源泉の流れを汲んだのに由るものであることは、既に W. Hasbach 其他の學者の慥かめ示すところである。

（加之ハスバッハはCumberlandに影響せられたケネエとShaftesburyを嗣ぐスミスとの相違を力説して居る）。然らば純經濟學說の上に於て二者の間には如何なる交渉があるか。スミスはTurgotから繼承するもの以外に經濟學に價値ある貢献をなしたる事なし（Turgotが果して嚴格なる意味に於けるフイジオクラアトに屬するや否やは姑らく措く）と云つたDupont de Nemourの極端說に對しては今日文献的に其反證を示すことが困難でない。スミス研究の一權威たるEdwin Cannanは、スミスのグラスゴオ大學に於ける講義筆記とフイジオクラアトに接觸した後に書かれた國富論とを比較することにより、結局恐らくフイジオクラアトの影響に由つてスミスが得たるものとして、國富論第二篇の資本論及び生産的不生産的勞働の說、第一篇價格論中に分配論の挿入せられたる事、並に「年生産（アニュアルプロダクツ）」の概念の力說せらるゝに至りし事を擧げて居る。此新所得はスミスの經濟學體系に取つて果して如何なる意義を有するものであるか。私は、他の點は姑らく措き、生産的勞働と不生産勞働の說、並に之と關聯する資本學說はスミスの富國策上の主託に取つては極めて主要なる論據を供するものであると同時に、此論據に基づく結論が、ケネエの場合に於けると同じく、奢侈浪費の排斥に歸着して居ることに興味を感ずるのである。ケネエのTableau Economiqueは、社會各階級の支出にして商工階級（不生産階級）に流入するものは何等の新たなる價値を生産しないのに、その農産物購入の爲め農業階級（生産的階級）に流入するものは、十割の純收益を生ずることを其表の前提として居る。而して此表が示す

ところの最も明白なる結論の一は、各階級の支出にして商工産物に投ぜらるゝ部分(虚飾の奢侈)大なるに從つて、國富の増進は妨げられざるを得ず。……l'excès du luxe de décoration peut très prompt-ement ruiner avec magnificence une nation opulente. と謂ふ事是れである。一方アダム・スミスは國富論第二篇に於て切りに資本の増減が一國産業(インダストリイ)の大小、從つて其國富の増減を左右することを力説し、而して此の資本は吝嗇(パシモニイ)(節約)によりて増加し、浪費及び失行によりて減小するものであるから、國富が土地勞働の年産物より成ると、金銀を以て成ると問はず、every prodigal appears to be a public enemy, and every frugal man a public benefactor. との結論に到達して居る。然らば何を以て浪費とし、何を以て節約とするかと云へば、それはスミスに從へば畢竟不生産的勞働者を養ふと生産的勞働者を養ふとの別に歸着するのである。固より何を以て不生産的勞働となし、何を以て生産的勞働とするかに關しては、スミスはケネエと其説を異にして居るが(スミスは結果の具體商品として殘るものを生産的勞働とする)、併しキアナンの考證する如く、抑も生産的勞働不生産的勞働なる者を認めるに至つたのがフイジオクラアトの影響であるとして、而して此一角から觀察すれば、スミスがフイジオクラアトから得た暗示は、スミスに取つては頗る價値あるものであつたと云ふ事が出來よう。これは私が平生スミスを讀んでひそかに下して居る論評の一ケ條である。

これは普通の慣例に從へば他人の著書に對する序文の體を成しては居らぬ。併し著者谷口君は、恐らく其著書が他人の紹

介を待たずに、正當に其自身の價値によつて世に行はれんことを希望せらるゝであらう。而して私が本書の刊行を喜ぶ情も、本書が著者自身並に世のスミス研究者に對する刺戟となつて、我邦に於ける此種の研究の益々深さと廣さとを加へん事を希ふに出づるを顧みれば、本書刊行の機會に刺戟せられて國富論を讀んで心着いた事の一端を記して序に代へるのも、必しも當を失した事ではなからうと信ずるのである。

大正十一年十二月十八日

鎌倉小町

小泉信三

自序

近世經濟學の始祖アダム・スミス（一七二三―九〇）逝いて百三十餘年、誕生の日を以て數へれば明年は正に二百年に相當する。彼れに對する毀譽褒貶は或ひは相半ばすると云ひ得るかも知れない。乍併經濟學祖としての榮譽と國富論の大伽藍とは、今日に至るまで彼れ獨自のものであり、また永遠に亙つて彼れのみの所有である。

今日から回顧すれば彼れの時代は既に幾代の昔に屬する。乍併如何に古くとも、國富論一卷は、絶對に經濟學徒の手を逸することが出來ない。現代の經濟學を十全に理解せんがためには、先づ以て彼れを知らねばならぬ。源泉を

究めずして末流のみ理解せんとするは不可能だからである。

國富論に關する斷片的の研究は既に數多發表せられ、また其の全譯も近く刊行の半ばにある。乍去之れに關する一貫せる研究に就ては寡聞にして未だ上梓せられたるものあるを知らず、且つ亦國富論は甚だ浩瀚であつて一讀これを會得するは容易の業ではない。されば此の兩面の意味に於て國富論全卷に亘る思想を摘約し、更に今日の立場を以て之れを吟味することは恐らく無用のことではないと思ふ。

本書の公刊はもとかゝる目的の下に企てられたものであるが、勿論私の微力を以て滿足にこれを爲し得たとは信じない。若少淺學の身を以て之れを企てるさへ不遜であり、また限りなき蘊蓄を有ちながら默として語らざる人々に對し恥ずべきことゝ思ふ。たゞスミス誕生二百年の日を迎へんとするに際し、經濟學上に於ける彼の貢献と學者としての風格を一般に傳へ、それに依つて經濟學の一書生たる著者がこの鴻儒の偉業を追慕するの記念としたいといふ私情から、敢へて此の微擧を試みたのである。寔に彼は科學者として偉大であつたのみならず、一個の人間として亦偉大なる人格者であつた。私は彼によつて科學上の知識を學ぶに止まらず、更によりよく生きんがための勇氣を與へられる。私は右の目的を達するために、與へられたる力と時間との範圍内に於ての爲し得る全べては爲した。

乍併かゝる主觀の事情が何等客觀的價値を左右し得るものでないことは云ふ迄もない。從つて本書を以て學者の座右に捧ぐべきものとは毛頭考へないのであつて、たゞ一般の人々にとつてスミスとその業蹟を知るの一助たるに役立つならば滿足である。本書が及ぶ限り趣味と平易とを旨としたのもまたそれがためであつた。乍併結果に於て必ずしも所期の効果を具現し得なかつたことは、一部分は問題そのものゝ性質に由るものであり、大部分は私自身の未熟な教養に歸するものである。

惟ふに淺膚なる學才と加ふるに僅少なる時間を以てして、少なからぬ過誤と不完全を免れなかつたことであらう。希はくは先學諸賢の助言と叱正を得て、他日完成の機に至らんことを切望する。

本書執筆のために參考引用せる書籍は、一々之れを場所場所に書き留めた積りであるが、なほ之等の外總括的には內外に於けるスミス研究者の論著に負ふ所少なくなかつた。夫等の人々に對しては茲に一括的に厚くその學恩を感謝し度い。

此機會に於て、私の研究の上のみならず私生活にまで限りなき庇護を與へられ、今また處女作を公にするに當つて少からぬ御世話を受けた小泉信三上田貞次郎兩先生の宏大なる恩愛に對し、深く感謝の意を捧げるものである。

大正十一年初冬

著者

オアシスを望む旅人の心もて

生き行くさがと知れば悲しき

幼兒の柔手をとりて指折りて

あゝわれ何を數へんとする

アダム・スミスの經濟思想

目次

一　國富論を孕める前半生と其環境……一—五三

(一)緒言—經濟學史上に於ける國富論の地位—國富論の成功と其所以—(二)誕生—其の父母—カアコウディの文法學校—グラスゴー大學の生活—ハッチエソンの影響—(三)ベリオル・カレッヂ遊學—ベリオルに於ける蘇國の學生—スミスの研學とオックスフォードの狀況—(四)カアコウディに歸へれるスミス—エディンバラに於ける修辭學及び美文學講義—グラスゴー大學論理學講師となる—倫理學教授被命—その所得—その講義內容—ミラーの評せるスミスの講義振—グラスゴー學會の創立—懇親倶樂部—ジエームス・ワットとの交遊—グラスゴーの商工業狀態—コックレーンとの親交—グラスゴーの街頭に於ける學徒—ヒユームとの永遠の親交—エディンバラ評論への寄稿—パ公外遊隨行の招請—その條件—グラスゴーに於ける最後の講義時間—大學評議員の追懷—(五)佛蘭西の黎明期—ツールズの滯在—國富論に着手す—ランゲドツク訪問—スミスのランゲドツク觀—ジエネバ訪問及びボルテールとの會見—スミ

スのボルテール評—巴里の滯在—女優リコボニのスミス觀—モルレー、チュルゴー其他—スミスとチュルゴー及びケネー—歸國—外遊前後の變化—佛國の政治的社會的狀態に對するスミスの觀察—(六)スミス當時の英國の社會狀態—その農業—その製造工業—勞働者に對する各種の束縛—內國商業—外國貿易の狀態—スミスの自由に對する憧憬と熱情

二　國富論の出現及び其影響……五三—八二

(一)カアコウディの隱遁生活—その日常—その住宅—著作に對する拮据勵精—ヒユームの勸告—(二)稿を手にして倫敎に上ぼる—ヒユームへの遺言—倫敎生活—獨占敎育に對する反駁—學位を無視せるスミス—リテラリー・クラブの會員となる—亞米利加殖民地の問題—謙遜なりしスミスの高風—フランクリンと殖民政策—(三)國富論の遲延—ヒユームの書簡—國富論の出現—その體裁及び稿料—ヒユームの歡喜—ギボンの批評—國富論の特色—ウエークフイールドの批評—在有方面に關する該博なる知識の一斑—國富論の內容—講義案との比較—(四)國富論の價値批判—ラスキン學徒—實際政治に對する影響（英佛獨）—リストのスミス觀—ジエ・エス・ミルとスミス—經濟學創爾の功

三　其人性觀と科學體系……八二—一〇一

(一)利己的人性觀と利他的人性觀—一七五九年のスミスと一七七六年のスミス—歷史學派の斷定—カンケンの見解—講義案に依る結論—グラスゴー大學に於ける道德哲學の講義內容—道德情操論と國富論との相違は佛蘭西旅行に由るものに非ず—(二)スミスの科學體系に於ける兩人性觀の關係—道德情操論の一齣—希臘哲學及びフイジオクラートとの一致—(三)經濟動機を自利心に置くる一例—そは理論に非ずして事實の認識である—自利心發動の社會的結果—生產方面—分配方面—社會的調和論の破綻—スミス當時の環境を見るの必要……一〇一—一一三

四　其研究方法……一一三—一二三

(一)演繹方法に依る—價格變動論への經濟本則適用—特殊の場合—歸納方法を以て補正す—抽象的方法の價値—(二)演繹法と歸納法との一致點及び相違點—ビグー敎授の見解—スミスの研究方法は至當

五　生產理論と分勞論……一二三—一三五

(一)生產理論の特色—生產理論として見たる分勞論—社會的富の根源—分勞論の價値—(二)國富と分勞との關係—分勞の概念と小製造業—留針製造業の實情—單純勞働に分割し得ない製造業—各種職業の分立—綜斷的の分勞—スミス以後に於ける分勞論の發達—(三)分勞の利益—技巧を增進せしむ—マーシヤル

博士の見解—機械の發明を促す—その實例—專門家の發明も分勞に由る—時間を節約する利益—その所以—ジエ・エス・ミルの反對—スミスの指摘せる以外の時間節約—(四)分勞可能の條件—勞働の自由と交換の自由—市場の範圍—都會と田舍の分勞—運輸の便と分勞—分勞の不利益—技術上の不具者—勞働生產力の減少

六　資本理論……一三五—一七一

(一)スミスの觀たる三種の資本—フイジオクラートの資本論—フイジオクラートのavances スミスのcapitalは同義語—大農法と小農法に於ける生產力の相違—チユルゴーこれをavancesに歸す—avancesの意義及び發生—チユルゴーの資本の意義及び種類—ケネーの資本の種類—(二)スミスの資本理論は生產論に屬せず—ストツクとキヤピタルの別—スミスのストツクはチユルゴーの動產に一致す—ストツクと生產力—キヤピタルと生產力—生產的勞働と不生產的勞働—他の分類—スミスの混亂—マルクスの見解—(三)社會資本—その種別—固定資本及び流動資本と其構成分子—スミスの眞意—生產資本と所得資本との融合を試む—住宅の例—スミス以後に於ける生產資本觀と所得資本觀—(四)スミスの資本論の缺點—資本理論の混亂を來せる所以—社會資本と非社會資本—所有關係と技術的生產の有無—固定資本と流動資本との限界—富の生產と所得の創造を同一視す—スミス以後の資本觀—リカルドオ—ジエ・エス・ミル—資本論の紛糾止まず—ロオドベルトス

七　價値及び價格論……一七一—一九七

(一)使用價値と交換價値の分類—兩者の背離—その誤謬—交換價値に關する三問題—(二)交換價値の眞正尺度—一財の購買し支配する勞働量—異種勞働量の比例を測定するの困難—交換せらるゝ相手方貨物の量—貨幣—金銀は自體の價値變動す—貨幣は價値の眞尺度たり得ず—勞働のみ眞正尺度—眞正價格と名目價格—價値尺度としての穀物—(三)價格構成の諸部分—初期野蠻の社會に於ける交換比率—資本蓄積後の交換比率—土地私有後の交換比率—賃銀利潤地代の三者價格を構成す—一切の所得及び一切の交換價値の三源泉—(四)價格高低の原因—需要供給の原則—バーボン及びロックの需給原則—自然價格と市場價格—自然價格の構成—市場價格が自然價格を中心として動搖するの所以—(五)スミスが絕對的勞働價値論者なるか相對的勞働價値論者なるかの問題—漠として眞相を捕捉し難し—其の理由—小泉敎授の見解

八　分配理論……一九七—二三九

(一)分配理論は國富論の一編をなさず—フイジオクラートの分配理論—利潤地

代貨銀の意義—日常用語との相違—(二)各所得の成立原因—賃銀の成立—勞働と資本との相違—利潤の成立問題—利潤は賃銀の一種に非ず—利潤は資本家が勞働者を雇傭する結果—利潤は事業危險への報償に非ず—勞働者窮貧の結果—之れを不勞所得と看做せり—スミスの別個の解釋—價値理論と分配理論との相違—地代の成立—之を自然の賜物と看做す—その誤謬—之を獨占の結果と看做す—地代成立の眞因—(三)貨銀の大小—三種の賃銀理論—スミスの生産力說—スミスの最低生活資料說—最低生活資料說の根據微弱—スミスの需給說—富の增加しつゝある國、停止せる國及び減退しつゝある國の賃銀—其最低生活資料說と需給說との連絡なし—最低生活資料說需要供給說共に誤謬—スミスの正論—社會的勞働の生產力と分配當事者の社會的權力關係に由る—(四)利潤の大小と貨銀の大小—國富の增進しつゝある國は利潤低し—利潤賃銀共に騰貴する場合—新殖民地の狀態—新領土新職業の出現に伴ふ利潤率—勞働者維持基金の減少と利潤率—國富の靜止狀態と利潤率—需要供給の原則を脫し得ず—スミスの缺點—(五)地代決定の四要因—何れも論據薄弱—スミスの差等地代の原理—地代は豐度及び地位の如何に由る

九　貨幣理論……二三九—二四二

貨幣の任務—紙幣の重要—紙幣の打歩—アムステルダム銀行券

一〇　社會政策その他……二四三—二八四

(一)政策の根本原理—自由主義の意義—國家干涉の弊害—自然的自由制度の利益—自由と責任—自然的自由の社會的制限—絕對的自由放任主義に非ず—個人主義に非ず—社會的調和論は理想論たるに止まる—(二)自然的自由制度の下に於ける政府の三大要務—國防のための航海條例、帆布火藥の製造保護—勞働者のための法規—暴利の否定—商業を容易ならしむる諸設備—教育制度—分勞の弊害と教育の必要—(三)一階級の利益は社會全體のそれに一致せずとの結論—リアリストの有つ矛盾—資本階級と勞働階級の利害相反—勞働階級の窮乏狀態—資本家の提案に對する激越なる批判—徒弟法居住法の不當—勞働階級の改善と社會—積極的勞働政策—國富論は資本主義經濟學に非ず—(四)自由貿易論—ピット及びシエルバーンの宣言—自由貿易論成功の所以—自由貿易政策の根本原理—自然的自由主義の國際的應用—消費者保護の思想—マンチェスタリズムの弊—自由貿易の除外例—スミスの世界主義と自國本位主義—レラティビストとしてのスミス—完全なる經濟自由の實現難—ケネー及びチュルゴーとの相違—人爲的制限の効用—反動政策としての自由貿易—自由貿易論の缺點とその必要—(五)租稅の四原則—公共事業のための課稅—生活必需品への課稅—和蘭共和國—公債の莫大—戰爭その他の濫費—議會に於ける國

目次

富論の引用—國費節約論の根本思想—殖民地貿易獨占の弊—スミスの殖民政策—新ユートピア—その結論　八

アダム・スミスの經濟思想　目次了

アダム・スミスの經濟思想

一　國富論を孕める前半生と其環境

古典派經濟學史上に於る最も偉大なる名は、アダム・スミスのそれである。國富論 An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations に現はれた彼れの所論の多くが、縱令斷片的にもせよ既に彼れ以前の諸家に依つて屢々取扱はれてゐたことは事實であり、亦彼れの死後、その學說が漸次展開せられて一層改善されたことも否定出來ない。されば スミスを以て純然たる經濟學の創成者と看做すことも、ま

た彼れを指して經濟學の完成者となすことも、均しく誤りである。乍併彼れの著述が、その前後に向つて最も便宜且つ適切な研究の基石を置いたものだといふことは斷言出來る。試みに彼れ以前の哲學者乃至經濟學者に就て其思想を點檢するならば、必ずや彼等の諸思想が全然斬新な觀照と適切な態度を以てスミスに包容されてゐることを發見すべく、更に彼れ以後の經濟學書を瞥見すれば、重要な諸點の多くが何れもスミスに源を發せることを知り得るであらう。それ故に若し經濟學史上にエポク・メイキングな貢献をなした著者の分類表が作られるとせば、その最高の地位は必ずや萬人の一致を以てアダム・スミスに與へられるに相違ない。また若し或る經濟學書をとつて「不朽」の名を冠せしめんとするならば、國富論こそ其權利を贏ち得べき最初のものでなければならぬのである。(1)

アダム・スミスは、國富論の出版後十五年にして世を去つた。乍併その時は既に第六版を出し、また歐羅巴の主なる國語に飜譯されて居つた。ビットの如きその心醉者の一人であり、ジョンストーンの如きも「國富論の著者は現代を說伏し、また次代を支配するであらう」といふ豫言さへなしたのである。果して其後の趨勢はこの豫言を裏書し、驚異すべき影響を實際社會に及ぼしたのであつた。スミス自身は、「貿易の自由が英國に於て完全に回復されることを期待するのは、オセアニア又はユートピアが英國に建設されるのを期待すると同樣、寔に愚の骨頂である」(2) と云つた

(1) Price, Political Economy in England, 8 th ed., pp. 1-2
(2) W. of N., Vol I, ed. Cannan, p. 435.（以下全べてキヤナン版に據る）

のであるが、しかも彼れの所說の直接間接の影響に依て、貿易の自由は彼れの死後完全に回復された。バヂョットは「國富論は驚くべき効果を擧げた」と謂ひ、また「如何なる政治哲學と雖も、國富論が我々に與へた影響の千分の一をも與へたことはなかつた。その教義は國民の常識となり、改廢すべからざるに至つた」と述べてゐるが、此の言葉は決して無用の誇張ではなかつたのである。(1)

然らば斯の如き比類なき、殆んど魔術的な影響を實社會に與へ得た所以のものは何んであつたか。恐らく此の疑問に對して「それはアダム・スミスの生涯と其環境であつた」と答へられるであらう。寔に彼れの生涯は、一見極めて平坦無事の如くに見えるけれども、仔細に彼れの經路を辿るならば國富論を生むことの必ずしも偶然でなかつたことを知り得るのである。(1)

(1) Bagehot, Economic Studies, p. 1.

二

アダム・スミスは今を去る凡そ二百年の昔、詳はしくは一七二三年六月五日、蘇格蘭の小邑カアコウディの地に生れた。父は同地の關稅吏であつたが彼れの生まるゝ數ケ月前既にこの世を去り、彼れは母の手一つで養育された。母は「餘り甘やかし過ぎる」と評判された程スミスを溺愛したのであつたが、長生したためその愛子の榮進を見屆け、のみならずスミスの限りなき孝養を享けて安らかに世を終へたのであつた。

スミスは幼年時代を通じて常に多病であつたが、幼時既

(1) Price, op cit, PP. 2-3.

にその鋭鋒を現はし、彼れが鄉里の文法學校に入學すると間もなく、その旺盛な讀書欲と異常な記憶力とに依つて人人の注意を惹くに至つた。ユートロービウスの「羅馬史要」の飛頁に「一七三三年五月四日、アダム・スミス藏書」と署名して居る所から見れば、彼れは八・九歳にして既に羅典語に親しんで居たことを知り得るのである。

彼れは十四歳の當時文法學校を去つてグラスゴー大學に入り、一七四〇年の春まで其處に在學して居つた。グラスゴーでは主として數學及び自然哲學を修め、希臘語はダンロップに、數學はシムソンに、倫理學はハッチエソンに學んだ。就中、當時に於ける最大の哲學者であり又一流の雄辯家であつた所のハッチエソンから最も多くの感化を與へられたのである。グラスゴー（一七三〇―一七四六）に於けるハッチエソンの事業は極めて重要なものであつて、彼れは大學の改革、惡弊の批判、思想言論の自由等のために努力せるところ少なくなかつた。また常に學生と交遊して彼等をして時勢に後れざらしめんことを計つたのであつた。當時ヒュームの「人性論」Treatise of Human Nature の出版さるゝや否や、彼れはスミスに勸めてその要略を作らしめたのであるが、當時僅かに十七歳の少年であつたスミスは立派に此の課程を完成し、後ヒュームは其の報酬として「人性論」一部を贈與したと傳へられる。

ハッチエソンがグラスゴーでなした講義の內容は、彼れの死後出版された所の「道德哲學の體系」System of Moral Phi-

losophy に依て明らかにせられたが、スミス後年の自然的自由說乃至樂天主義は、主としてハッチエソンに負ふものであることは疑ひの餘地がない。ハッチエソンもスミスも共に改良主義者であつて、ヒユームよりは餘程樂觀的であつた。ヒユームは、改良と云つたやうな事には少しも熱心がなく、事物はあるが儘のものであり又なるやうにしかならないものだと考へる生來の冷評家であつた。然るにハッチエソン及びスミスにとつては、社會がより善く統治されねばならぬといふことは殆んど其の宗教的信仰であり有用なる眞理を普及し有害なる誤謬を一掃して、以て人類の幸福を增進するといふことは、彼等の生涯に於ける至上目的だつたのである。スミスはその哲學の方面に於てはハッチエソンの精神的後繼者であると云つて差支ない。彼等の捉へた問題が類似してゐるのみならず、議論の極く些細な點まで多くの類似を見ることが出來る。(1) スミスは、先人としてハッチエソンと同じ大家を捉へ來り、また夫等の諸大家をハッチエソンと同じ目的に引用してゐるのである。ハッチエソンの未熟な斷片的な經濟學さへも、スミスに對つて多くの示唆を與へ、後年その講義に於て漸次開展され精練されて遂に國富論に包容さるゝに至つたのである。されば、スミスはその晩年に至るまで「東の間も忘るゝことなき博士ハッチエソンの才德」を追想して熄まなかつたと謂ふ。(2)

三

(1) Scott, Francis Hatcheson, 1900, PP. 210, 231. (Cannan's introduction to W. of N., P. XXXVI)
(2) Hirst, Adam Smith, PP. 1-7.

スミスは十七歳の初めグラスゴー大學を去り、一七四〇年六月蘇格蘭を出發、同年七月十七日スネル基金の給費生としてオックスフォードなるベリオル・カレッヂに入學した。

オックスフォードに於ける彼れの生活は餘り幸福ではなかつた。ベリオルに於ける蘇格蘭の學生は何れも繼子の待遇を受け、スミス及び他の給費生はその虐遇に堪へかねて、一七四四年グラスゴー大學の評議會に不平を訴へた程であつた。併しベリオルとグラスゴーとの軋轢は其後も猶ほ長く繼續された。スミスが「人性論」の要略を完成して著者ヒュームから原本一部を贈與されたことは既に述べた所であるが、此の書物はベリオルでも常にスミスの座右にあつた。然るに或る日寮長のために之を發見せられスミスは不信仰な讀書をなすものとして嚴びしく譴責されたと傳へられる。(1) また數年後給費生の一人が語つた所に據ると、彼等蘇國の學生は何れも他のカレッヂに轉學することを切望して居つたといふことである。斯の如き待遇が、學生の頭腦に拭ふべからざる不快の印象を殘したことは云ふ迄もない。三十年後、アダム・スミス自ら「閉鎖的學問」に對つて鋭い宣言を發し、强制的な「擬物の講義」を罵つたのは、當時に於ける彼自身の苦い經驗から來たのであつた。(2) 斯かる四圍の冷遇がオックスフォードに於けるスミスの生活を虐げたのみならず、彼れはまた痼疾のために苦しめられた。一七四三年十月二日附の母への書信に「私

(1) McCulloch, Accounts of the Lives and Writings of Quesney, Smith, and Ricardo. PP. 19-20.
(2) W. of N., Vol. II, Bk. V, Ch. I, Pt. III. Art. II.

は今激しい懶惰の發作から回復した所です。このために私は、三ヶ月といふものは肘掛椅子から離れることが出來ませんでした」と謂ひ、また一七四四年七月二日附の書信には「御無沙汰して申譯けありません。私は毎日あなたのことを考へてゐます……併し時には仕事と友人のため、又始終懶惰のために妨げられるのです」と記してゐる所を見れば、大樣この間の消息を知り得ると思ふ。

唯彼れにとつて不幸中の幸福ともいふべきは、ベリオルカレッヂがその立派な圖書館を大學生に解放して呉れたことであつた。不活潑な性質に加ふるに極めて儉ましい生活をしなければならなかつたスミスにとつて、ベリオルに於ける六ヶ年が殆んど圖書館での讀書に費されたといふことは、何等不思議のないことである。彼は大學の正課を勉强するよりも、寧ろ古今の文學に關する該博な知識を得ることに勗めた。之れは後年に至つて彼れの著述の內容を豐富ならしめる機緣となつたのであつて、殊に彼れは佛蘭西の作者を愛好し、自己の文體を改善するために常にその飜譯を試みたといふことである。讀書以外スミスの娛しみとしたことは、時々近在を遠足することゝ散步することであつた。彼れが國富論を草するに當り、英國と蘇國に於ける勞働者の狀態を仔細に比較對照せしめることの出來たのは、主として當時に於ける濃やかな觀察に基づくものと考へられるのである。(1)

スミスが休暇中をどうして過ごしたかといふ事は明ら

(1) W. of N., Vol. I, PP. 75-80.

かでない。唯餘り裕福でなかつたゝめに、六年の間一と度びも故國を訪ふことなく、また倫敦へすら行かなかつたことは事實である。斯くの如くにしてオックスフォード六年の生活は終つた。そして一七四六年八月再びカアコウディなる慈母の許に歸つたのである。

四

故國に歸へつたスミスは、一七四八年に至る凡そ二ヶ年の間、將來に對する何等の方針を定むることなく唯悠々として好むがまゝの研究に耽つた。「天文學史」「古代物理學」「古代の論理學と形而上學」「繪畫と彫刻」の如き諸論文は、この平穏なる二ヶ年間の所産であつた。

然るに二ヶ年の時の經過は、遂ひにスミスをして世に出づるの機會を齎らした。即ち彼れは、その隣人にして海軍事務官たりしジエームス・オスワルドを通じてエディンバラ辯護士會長ヘンリー・ホーム（ケームス卿）に知られ、その勸めに依て一七四八年冬エディンバラに修辭學及び美文學に關する講義を初めたのであつた。之等の講義は何れも當時に於ける先人未拓の論題であつて、非常の稱讃を受けた。加之一七五〇年からは更に經濟學の講義を行ひ、その中に「自然的自由」並に「自由貿易」に關する學說を發表したのである。

エディンバラの講義にその蘊蓄を認められたスミスは一七五一年一月九日評議會の萬場一致を以てグラスゴー大學論理學講師に選任せられ、更に翌年四月二十九日倫理

學教授クレイヂイの後を受けてその後繼者となつた。彼れは年百七十磅の所得の外、更に大學構内に住宅を與へられ、此處にカアコウディから訪づれた母並にその從姉妹ダグラス嬢と共に、彼れの所謂「最も有用にして最も幸福なりし」グラスゴー十三年の歳月を送ることゝなつたのである。

グラスゴー大學教授としてスミスの行つた講義は、彼れ自ら出版した所の「道德情操論」The Theory of moral Sentiments 1759 と「國富論」並にエドウイン・キャナンの出版に係る「講義案」Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith reported by a student in 1763 and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, 1896. に依て略ぼ其内容を窺ふことが出來るのであるが、スミスの高弟ジョン・ミラーの言葉はスミスの講義振りを傳へて甚だ興味あるものと思ふから、茲にその一節を引用したい。

即ちミラーは曰ふ

彼れ(スミス)の態度は優雅ではなかつたが撲訥で且つ天眞爛漫であつた。彼れはいつも其の問題に興味を持つてゐるらしく見えたゝめ、その聽き手の注意を反らす樣なことは決してなかつた。各個の講話は大抵五六の命題から成り立つて居たが……彼れが夫等を説明しようとする場合、最初の間は十分にその問題を理解してゐないかの如く多少躊躇しながら語るのを常とした。乍併その進むに從つて彼れの態度は熱烈となり活氣が付いて、その言葉は平易に且つ流暢となつた。……彼れの引例

の豐富と多樣とのため問題は漸次その手中に膨脹し、而かも同一の意見を冗々しく反復することなく、同一の問題をそれが表示されてゐる所の樣々な陰影や局面に依て追及し、結局此の美はしい理論の連鎖が出て來た所の最初の命題若くは一般的眞理に歸納せしめて、聽衆の注意を捉へ又彼等に教訓と均しく愉快を與へると思はる大いさに達したのである

と。尙ほスミスの道德哲學の講義に就ては、スミス傳の最初の著者たるダッガード・スチュアートが之を傳へて居る（本書八十六頁參照）。(1)

スミスが教授として赴任せる當時のグラスゴー大學は教授及び其の講義の標準も高まり、且つオックスフォード

(1) Hirst, op. cit., P, 34.
Cannan's Preface to Lecture, PP. XI—XXII.

乃至ケンブリッチに於ける如き專斷的氣風はなかつた。一七五二年卽ちスミスの赴任せる翌年、彼れは同志と共にグラスゴー學會 Literary Society of Glasgow を興し、教授の外ダビッド・ヒューム、ダルリンプル、ジョン・カランダー、ロバートフールッ等を會員として、毎週一回學術の討究を行つた。また其の頃數學教授シムソンを會長とする所の懇親倶樂部があつた。此の倶樂部は、部員が毎週一二回づゝ會合して飲食を共にする一つの娛樂機關に過ぎなかつたが、之等部員の中にユークリットの出版者たるシムソンを初め、經濟學の發見者スミス、近世化學の創始者ジョセフ・ブラック及び蒸氣機關の發明者ジェームス・ワットの居つたことは言外の興味を惹く。ワットは一七五六年（當時二十歲）倫敦

からグラスゴーに移つたのであるが、鐵工組合のため開業を許されなかつた。そこでグラスゴー大學教授は數學器械の製造者として彼れを迎へ、大學構内に仕事場と賣場を與へたのであつた。スミスが、鐵工組合の暴虐からワットを救ふために喜んで盡力したことは云ふまでもない。スミスは屢々その仕事場を訪ひ、聽て彼等は親密な朋友となつた。後五六十年の歳月を經てワットが八十三歳になつた時、彼れが新たに發明した「彫刻機械」を以て作り上げた最初のものは、象牙製のスミスの半身像であつたと謂ふ。(1)

スミスは研究の餘暇屢々市中を訪れ、繁華な市場に漲つてゐる所の緊張せる空氣を呼吸することが多かつた。市内には殆んど貧民はなく、また罪人も少なかつた。彼れは

(1) Hirst, op. cit., PP. 95-97.

その講義の中で「グラスゴーではエディンバラよりも罪人が少ないが、それはグラスゴーがより以上の商業と財産を持ち召使や家來の少ないためである」と述べたといふことである。彼れが學生として初めてグラスゴーに來た時は同市は未だ極めて貧弱な町であつた。併し彼れが教授として再びそこを訪づれた時は、既にその商業上の繁榮は初まつて居つた。即ち植民地の市場はグラスゴーに解放せられ、同市の進取的商人は對米貿易の獨占的利益を享受してゐたのである。また工業の方面も次第に勃興し、四十年代には亞麻布・銅・錫・陶器、五十年代には敷物・縮絨・絹物等がその主産物となつて、一つの製作所は悠に數百の勞働者を使用するに至つたのである。ギブソンが同市の歴史に於て

謂ふ所に據れば、一七五〇年（グラスゴー銀行の創設された時）以後「市中には一人の乞食も見當らなかつた」といふ。スミスはまた國富論の一節に曰ふ「グラスゴーに銀行が創設されて後、約十五年の間に同地の取引高は倍額となり、エディンバラに二個の公立銀行が創設されて以來蘇格蘭の取引高は四倍以上に達した、と聞く」と。(1)

當時クライド最大の商人アンドリュー・コックレーンは毎週一回開催の倶樂部を創立して商業の本質並にその諸原則を研究する機關としたのであつたが、後この倶樂部に參加したスミスはコックレーンと親交を結び、後年アレキサンダー・カーライル博士は、スミスは「彼れが國富論の資料を蒐集しつゝあつた當時、此の紳士（コックレーン）の教示に負ふ所

(1) W. of N., Vol. I. P. 280.

あつたことを承認した」と傳へてゐる。(1)

今之等の消息に據つて觀れば、グラスゴーに於けるスミスは單に教壇の人であり書齋の人であつたのみならず、又實に街頭に立てる熱心な學徒であつたことを知り得るのである。グラスゴー十三年の生活が、如何にその不朽の名著を生むに與つて力あつたかといふことは、我等の注意し且つ承認しなければならぬ所であると思ふ。

猶ほグラスゴーに於けるスミスに就て記すべきことは少くないが、就中ダビッド・ヒュームと永遠の親交を結ぶに至れる事實、並にエディンバラ評論の寄稿家として大陸文學乃至佛蘭西哲學の紹介批判に貢献する所あつた一事(2)を、讀者の記憶に止めて貰ひ度い。

(1) Carlyle, Autobiog aphy, ed. Burton, 1863, P. 73.
(2) Hirst, op. cit., PP. 109—111.

スミスがグラスゴーを去るに至つたのは、一七六三年秋バックル公の外遊に際し、その隨行を懇請されたゝめであつた。此の招請は收入の點から云つても確かに「滿足である。スミスは旅費として年三百磅を受け、尙終生年金として三百磅を給與される約束であつた。ローの云へる如く、彼れはグラスゴーに於ける二倍の所得を得るに到つたのみならず、それは死するまで保證されたのである。

スミスのグラスゴーに於ける最後の講義に就て、テイトラーは次の樣な挿話を傳へてゐる。スミスは彼れの最後の講義を終へた後、ポケットから紙包みにされた學生の謝禮金數個を取出し、學生の名を呼んで夫を渡さうとした。

所が若き學生は斷乎としてそれを謝絕し、そして曰つた「私が之まで受けた敎訓と歡びとは、私が曾つてそれに報い又償ふことの出來たよりヨリ以上のものでありました」と。敎室に於ける凡ての者も亦同樣に叫んだ。併しスミスはその志を曲げなかつた。彼れは穩やかに感謝の情を語つた後「私は自分が正しいと思ひ當然であると考へることを完成しないでは滿足出來ないのです。諸君はこの滿足を拒絕してはなりません。いや諸君は誓つて拒まないでせう」と謂ひ、そして靑年の上着を捉へてポケットに金を投げ込み、彼れから押し離して了つた。之を見た殘りの者は最早どうすることも出來なかつた。そしてスミスのなすまに委すより致方なかつた、と。(1) 猶ほスミスの辭表に接

(1) Tytler, Kames. P. 278. quo. Hirst. PP. 115—116.

して語つたグラスゴー大學評議員の次の言葉は、「幸福なりし」グラスゴー生活の片影を傳ふるものとして、蓋し適當の斷定であらう。

本大學はスミス博士の辭任に際し、敎授諸君の心からの愛惜を表明せざるを得ない。彼れの比類なき誠實と溫厚なる性質とは、同僚の尊敬と愛情を得せしめた。彼れの非凡なる天才と偉大なる能力、並にその該博なる學識は此の社會に對して多大の名譽を生んだ。彼れの優美にして巧妙な「道德情操論」は、歐洲全土の鑑識ある人々並に諸學者の尊敬を齎した。抽象的問題を說明する場合の巧妙な技倆と、有用な知識を傳へる際の忠實な精勵とは、彼れをして優秀なる敎授たらしむると共に、彼を圍繞する靑年に對し直ちに偉大なる歡びと最も重要なる敎訓を與ふるに至つたのである。

五

一七六四年の初め英國を旅立てるスミスの一行は、同年二月十三日巴里に到着した。スミスが佛蘭西に上陸せる後一週間、ボルテールはショーヴランに對つてかう云つた「あらゆるものが革命の種子を撒いてゐるやうに思はれる」と。寔に當時の佛蘭西は、永年その失政を覆うてゐた所の暗澹たる密雲を、智的照明の閃光を以て一掃せんとしつゝあるの時代であつた。佛蘭西の精神は既に暗黑ではなかつた。ボルテールの探照燈は、國家及び敎會の眞相を明らかにし、ディデローの偉大なる燈火とルッソーの爛々たる

炬火とは、壓迫されたる文明を搖籃の自由に返へさうとして居つたのである。

巴里に滯在すること十日、スミス一行はヒユームと別れてツールーズに向つた。ツールーズは大學や大僧正管區のある地方都市であつて、ラングドーの貴族や名士等の避寒地であり、又英國の旅行者に好都合な保養地であつた。それは氣候の良いのと氣持よい社會のためであつたと謂ふ。ハーストは、社會上智力上の中心たる點で、それは「佛蘭西のエディインバラ」と云へるだらう、と述べてゐる。スミス一行にとつて幸ひなことには、ヒユームの從兄弟なるコルバーが當時監督區の監督代理の職にあつた。巴里に於けるヒユームの人氣は素破らしいもので、彼れの紹介狀は到るところ有益であつた。コルバーはスミス一行の到着と共に直ちにヒユームに書を送り、彼等の滯在を愉快ならしめるために彼れのなしうる全力を盡すであらう、と誓つたのであつた。一ケ月後にはコルバーは全くこの新來の友に心醉し、「スミス氏は卓拔の人間である。彼れの心底も均しく驚異すべきものである」と云つてゐる。乍併コルバーの懇切な待遇があつたにも拘らず、ツールーズに於けるスミスの生活は餘り愉快でなかつたらしい。七月五日ヒユームに送つた手紙には、リシュリュー公、ロルジュ侯夫人等への紹介を依頼した後「余がグラスゴーでなした生活は現在こゝでの生活に比し、愉快に過ごした生活であつた。余は時間を潰すために書物を書き初めた」と記して居る。乍併

この淋みしい生活も、彼れにとつては決して後悔すべきものではなかつた。彼れが「時間を潰す」ために初めた書物は後年國富論を完成する第一歩となつたのである。

彼等は八九月の頃ボルドーに遊び、十月二十一日再びツールーズに歸へつた。之から以後、すべては穩やかに進んだらしく、ヒュームに宛てた手紙には、ヒュームの寄越したハアトフォード郷（駐佛英國大使）からリシュリュー公への紹介狀を感謝し、最後に付け加へて「私達は殘りの時を平和と滿足を以て送り得るのみならず陽氣に且つ面白く暮せるだらうと思ふ」と云つてゐる。

スミス一行は、當時佛蘭西に存在せる六つの地方議會中最も重要なものであつたラングドック州の會合を見るためモンペリエーを訪うた。其處で彼等は、後年國富論を邪惡だと謂ひ道德情操論を不條理だと罵つたHorne Tookeやナルボンの大僧正カルヂナル・ヂョンなどに會つた。

彼等はモンペリエーとツールーズで多くの議員に面會し、進歩せる佛蘭西人が「祖國を改革するための典型」として好んで引用した所の一地方の裁判組織行政組織を洞察することが出來た。スミスは佛蘭西の裁判に對して寧ろ有利な見解を下し「議會は多くの點に於て恐らく非常に都合のよい裁判所ではないが、彼等は決して呪詛されなかつた」また決して怪しまれもしなかつた」と述べてゐる。

ラングドックに於ける長い滯在は、佛蘭西の社會狀態乃至經濟狀態に對して彼れが曾つてリモージュで得た印象

よりも、もつといゝ印象を抱くに至らしめた。ラングドックは二百萬の人口を有し、トックヴィールに從へばそれは非常に整頓した、また最も繁華な土地であつた。その道路は、强制的賦役を課することなしに作られ且つ改修されたものであるが、完全なことは佛蘭西第一であつたと謂ふ。スミスはバーガンディーの大運河に驚嘆すると共に、多額の費用が河川及び道路の發達改善に投じられてゐるのを目擊した。當時佛蘭西の各地には、王室費を以て養育院を建設してゐたのであるが、比較的有福なこの土地では殆んどその必要は認められなかつた。財政組織並に信用組織の點に於いても、佛蘭西の地方中その右に出づるものはなかつたのであつて、例へば人頭稅の代りに地租を課し、取稅請負人を使用しなかつた等其の一例である。ラングドックの優秀な地方行政と他の地方に於ける中央集權の餘弊とは、屢々國富論の著者に取扱はれた所であるが、彼れの所論は後年トックビールの「革命前に於ける佛國社會の研究」に依つて確認された。

スミス一行は、約一年半の歲月をツールーズに過ごせる後、南部佛蘭西の土地を横切つて、ジエネバに向つた。其處でスミスは、彼れの二つの熱望卽ち共和政體とボルテールに對する欽仰を滿たすことが出來た。この小共和國は恰度憲政上の動亂が勃發してゐる時であつたが、その擁護者はいふまでもなくボルテールであつた。ボルテールは歐羅巴に於ける知名の文豪であるが、當時ジエネバの郊外な

るフエルネーに住んでゐたのである。スミスはその短かい滯在期間に五六回フエルネーを訪づれ、ボルテールに對する欽仰を一層深めたと傳へられる。サミユーエル・ロージャースは、スミスの世を去る一年前彼れに面會したといふが、その時スミスは卓を叩いて「そこにはボルテールの外誰もなかつた」と叫んだと謂ふ。またサン・フオンが一七八四年エディンバラに彼れを訪問した時、彼れはボルテールの立派な半身像を示しながら、ボルテールの哲學に負へる無數の債務を告白し、「ボルテールは人類に對して、かの嚴格なる哲學者達がなしたよりも遙かに大なる利益を與へた。之等嚴格なる哲學者の書物は、極めて少數の人に讀まれるに過ぎないが、總べての人のために書かれたボルテールの書物は總べての人に讀まれる」と述べ、更に墺太利のジョセフ二世が「哲學者として旅行する」と云ひながら而かもピーター大王の歷史家に敬意を表することなくフエルネーを通過した不都合を責め、「ジョセフは劣等な人間に過ぎなかつた」と斷言したと謂ふことである。ボルテールの方でも亦、道德情操論に依つて既にスミスを尊敬して居たといふことは、彼れの親友トロンシヤン博士（ジエネバの有名な醫師）が、その子息をグラスゴーなるスミスの下に留學せしめたといふ一事に依つても想像することが出來る。

スミスの一行は、一七六五年の十二月上旬、ジエネバを立つて巴里に歸つた。當時ヒユームは年九百磅の恩給を受くる有福の身となつて大使館を退き、貧乏で氣隨なルツソ

ーと正に故國に歸らんとしてゐる所であつた。スミスは忽ち宴會と哲學の渦卷に投げ込まれた。科學と文學の流行してゐる巴里、人氣役者ヒユームの親友、道德情操論の著者――巴里の交際社會が熱狂的に歡迎したのも無理はない。彼れは殆んど十ヶ月の間十二分の歡樂を味はつたのである。一七六六年三月、ヒユームからブツフレール伯夫人に出した手紙には「友人スミスの受けたあなたの御厚意を感謝します。彼の風采や態度は、彼れの隱遁生活のため恐らく苦勞人のやうに傷はれてゐるかも知れないが、彼れが眞に價値ある人間であるといふことは御わかりになつたでありませう」と述べ、夫人の返事には、夫人がスミスと近附きなつたこと、心から彼れを歡迎したこと、道德情操論を讀んでゐるがそれは必ず私を喜ばせるであらうと信ずるといふことなどが書かれてゐる。

巴里に於けるスミスは、また熱心な觀劇家であつた。當時の名女優リコボニ夫人のガリックに與へた手紙にはかう記されて居る。

「スミス氏を御紹介申し上げます。同氏を御紹介申し上げなかつたことは、今日迄大變殘念に思つてゐたことでありました。この愛すべき哲學者は機智を示すでありませう。私は機智なしに話す人を嫌ひます……。おゝスコットランドの人々！彼等は犬のやうに私を喜ばせます。私は彼等の言葉を聞きます、狂へる程愛する若き女が情人の囁きを聞くやうに。そして快樂のあとに來る

悔悟のことを考へませぬ。私を叱つて下さい、打つて下さい、殺して下さい、夫でも私はスミス氏が好きです、非常に好きです。惡魔が現代のあらゆる文人、哲學者を拉し去つて、唯スミス氏だけを私の手に殘して置いて呉れゝばいゝと思ひます」

「スミス氏はスコットランド人で非常に値打のある人です。又善良な心と軟かな優さしい性格と、機智と、智慧の持主です。そのスミス氏が、私にあなたへの手紙を求めました。あなたは、彼れが實踐哲學者であり、道德家であり、學者ぶらない愉快な人であることを見出すでありませう……」

ダッガード・スチュアートは、スミスがダランベール、エルヴェチユース、マルモンテルと交りを結んだと傳へてゐるが、彼れがチユルゴーやモルレーに初めて會つたのもエルヴェチユースの家であつた。モルレーは彼れの傳記の中で「彼れは非常に下手な佛蘭語で語つたが、その道德情操論は既に私に、彼れの深遠にして聰明なる大思想を與へて居つた。私は、取扱つた全べて問題に對して最も博大な觀察と解剖を行つた人として、彼れを仰視したのである。私と同樣形而上學の愛好者であつたチユルゴーも、彼れの天才を尊敬して居つた。私達は屢々彼れに會つた。彼れはエルヴェチユースの家を訪づれ、私達は商業・銀行・貸借の理論並に彼れが著述中であつた大著の中の諸問題を論じた。」と述べてゐる。チユルゴーの「富の形成と分配に關する省察」Réflexi-

ons sur la formation et la distribution des richesses は、當時「市民日誌」Ephémérides du citoyen に掲載されてゐた。(1) スミスとチュルゴーの經濟論に於て、何れがそのトピックスを與へたかといふことは、注目すべき問題である。この問題に關する一例證としてエドウイン・キャナンは、スミスに示唆を與へたものはチュルゴーではなくして、チュルゴーの師とせるケネーその人であつたと云つて居る。(2)

ケネーは經濟學に於ける新體系の發見者であり佛蘭西經濟學派の始祖であつて、チュルゴー、モルレー、リヴィエールの如き何れもその學徒であつた。若し佛蘭西學派がスミスの大著に影響を與へたものとすれば、それはキャナンの考證する通り、ケネーであつたに相違ないと思ふ。國富論

(1) Cannan, A History of the theories of Production and Distribution, 1917. P. 183.
(2) Cannan, ibid. PP. 183—185.

の結論にはフキジオクラートの所論と符合する所が少くないのみならず、その第四卷第九章を見る者は、スミスがケネーを知つてゐたと共にその著「經濟表」Analyse du Tab'eau économique の愛讀者であつたことを疑ふことは出來ない。乍併スミスは飽く迄フキジオクラートではなかつた。「全べての富は土地から生まれる」といふフキジオクラートの學說は、スミスの批判に依つて決定的致命傷を受けたものと考へられるのである。

一七六四年の初頭祖國を離れてより前後三年、スミスは歸心漸く切なるものがあつた。一七六六年の初秋、國富論の出版者に宛てた手紙には「余は此の地で幸福であるが、長い間舊友との再會を熱望してゐる。余が若し海の彼岸な

る貴下のもとに達するならば、再びそれを横切ることは斷じてなからうと思ふ」と認めた。彼等の歸國は或る兇變のために一層早められた。先きにボルドーからスミスの一行に加はつた公爵リシュリューの弟――當時十九歳であつた青年スコットが、十月十九日巴里の街頭で暗殺されたのである。スミス一行は倉皇として巴里を發し、十一月の初め倫敦に到着した。スミスの態度、應對振りは殆んど一變し、昔の無骨さは見られなかつたと謂ふ。

國富論に擧げられた例證には、スミスが佛蘭西旅行で得たものが少くない。夫等の描寫は、アーサー・ヤングの著書やチュルゴー、ボルテール等の書簡に表はれたものよりも餘程樂觀的であると云ふ。ハーストの註に據れば、ヤングの旅行はスミスよりも二十年後のことであり、またチュルゴー、ボルテールの如きは革命家の常として現實を過度に悲觀視したものである……と。スミスは佛蘭西を觀察して、それは世界に於ける富强國の一つだと看做した。國富論の第一編九章には、佛蘭西・和蘭・英蘭及蘇格蘭の比較がある。先づ和蘭を擧げて「和蘭はその土地の廣袤と人口の比例から云へば、英蘭よりも富國である。和蘭の政府は二分で金を借り、信用の高い個人は三分で借りる。勞働者の賃銀は英蘭よりも和蘭が高いと稱せられ、また和蘭人が歐洲の何れの國人よりも低い利潤で取引することはよく知られてゐる。最近の戰爭の間に佛蘭西の運輸貿易は全べて和蘭人の手に歸し、彼等は今尙はその大部分を維持してゐ

るのである」と述べ、更に英蘭に就て曰ふ「佛蘭西は恐らく現今では、英蘭程の富國ではない。佛蘭西の法定利率は往々英蘭より低いけれども市場利率は一般に高く」貿易の利潤もまた佛蘭西の方が高い。「英蘭の臣民が、貿易の非常に尊重さるゝ國よりも、寧しろその輕侮される國に資本を投じやうとするのは此の理由に基くのである」云々。なほスミスの言葉は蘇佛兩國の比較に續く、曰く「勞働者の賃銀は英蘭に於けるよりも佛蘭西の方が低い。蘇格蘭から英蘭に行く時、兩國に於ける普通人の間に見らるゝ服裝及び容貌上の相違は全く彼等の狀態の相違を示すものである。佛蘭西から歸國する時は、この相違は更に大きい。佛蘭西は云ふまでもなく蘇格蘭より富國であるが、その進歩は蘇格蘭ほど迅速でないように見える。」(1)

革命前の佛蘭西が失政に惱んでゐた事は事實である。乍併それは豐饒な土地と豐富な人口を傷ひはしなかつた。當時のボルドー、リヨン、マルセーユは、富と人口に於て、コペンハーゲン、ストックホルム、セント・ペテルスブルグ、ベルリン以上であつた。スミスはこの現實を直視して、佛蘭西は富國であると斷定したのである。乍併彼れは、國家の富强といふことゝ個人全體の幸福といふことゝを混同はしなかつた。彼れは勞働貧民の生活狀態を看過しなかつた。佛蘭西の土壤と氣候とは、英國より善良である。都會といはず田舍といはず、立派な家屋が立ち並んでゐる。而かも貧民の生活狀態は非常に惡い。英蘭では男女共に皮靴を

(1) W. of N., Vol I. PP. 92—93.

履き、蘇格蘭では男だけそれを履き、佛蘭西では男女とも木履か跣足かである。(1) スミスは、之等の原因を租税組織の缺點にありとし、その改革に關する見解を詳說した。(2) 國富論の出版後五十年、一註釋者は「佛蘭西現在の租税は、スミス博士の示唆せるところと殆んど同樣になつてゐる。人頭税は全廢せられて地租となり、各種の租税は各地方とも平等になつて、主として政府の指命せる官吏に徵收されてゐる」と述べて居る。(3)

六

國富論出版前に於けるスミス半生の經路は、大樣右の如くであつた。斯の如き生涯は寔に平坦無事、かのマルクス乃至クロポトキンに於ける一半の迂餘曲折を見ることが

(1) W. of N., Vol. II. PP. 354—355, 389.
(2) ib., PP. 388 以下
(3) Hirst, op. cit., PP. 118—143.

出來ない。而かもかゝる生涯の中に、死後百餘年依然としてその榮名を謠はるゝ名著は孕まれたのである。夫等の諸點は既に右の敍述中に述べた所であるが、尙ほスミス當時の經濟狀態に就て一言附け加へたいと思ふ。

彼れの時代は舊產業時代の末葉に屬し、新產業時代の端緒は未だ初まつてゐなかつた。產業の續行を指示すべき制度法令は、既に其發生の當初に於ける價値と力を失ひ、唯無用なる過去の遺物として殘存してゐるに過ぎなかつた。スミス大半の生涯に於て、英國の農業は依然として中世紀同樣の方法を採つてゐたのである。卽はち多くの地方には、尙ほ散在せる小區分地のまゝの開放地 unenclosed field があり、未耕地の切株や牧草地の草は共有であつた。スミス

自身も「英國の殆んど大部分は未だ耕作されてゐない」と述べて居り、また一般耕作の方法も非常に幼稚なものであつた。ノーフォークの如き特殊の地方を除いては、適當な輪作方法もなく、家畜の科學的飼育もなく、また蕪菁乃至人工植物もなかつた。ノーフォークのタウンシェンドは既に「蕪菁タウンシェンド」Turnip Towrshend の渾名を得て居りライセスターシャイアーのベークウェルは、飼育法の原理を學ばんとする全世界の訪問者を惹きつけて居つた。乍併之等の近代的方法は、その發祥の地に局限せられ、爾餘の地方では依然として原始的非科學的方法を採つてゐたのである。(1)

斯の如き狀態は、製造工業に於ても變りはなかつた。何となれば此處にも亦面倒な制規と强制的な慣習があつたのである。「製造業者」(マニュフワクチュラー)なる言葉は、未だその原始的意義即ち「自分の手で働く」といふ狀態を脱して居らず、製造工業の大部分は、職人が自分の手を以て自分の家で働く所謂「家內工業制度」の下に行はれて居つた。尤も此の時代に於ても既にスミスが「企業家」(アンタープライザー)と呼んだ資本家的雇主の多少の實例はあつたのであるが、スミスは「製造業者」といふ言葉を常にその原始的意義に用ひて居る。勞働者は多くの場合、一定の年期奉公を勤め上げて勞働組合の免許を受けなければ手工業を營むことが出來なかつた。職人が使用する年期奉公人の數及びその勤務條件は、多くの都市に於ては定款により、或る都市では成文法同樣の慣習に依つて規定され

(1) Toynbee; Lectures on the Industrial Revolution of the 18 th Century in England 6 th ed., PP. 13—22.

て居つた。一地方から他の地方に移住せんとする勞働者は、居住法 Law of settlement のために其の原住敎區に送還される危險があつた。それは一敎區に於ける勞働者數が一定率以上になることを惧れたためなのである。羊毛產業は、その當時に於てもなほ英國の主要產業であつたが、鐵工業は極めて幼稚な方法でサセックスで行はれてゐるのみで、それも殆んど消滅せんとして居り、棉工業は國富論では殆んど記述されることなく、記述されても唯附隨的である程に微々たるものであつた。[1]

乍併勞働の上に加へられた勞働組合・居住法・年期奉公制度等の束縛を除けば、內國商業の狀態は殆んど完全に自由であつた。唯交通機關の不備のためその發達が妨げられてゐたのである。外國貿易の方は、內國商業に比すれば非常に束縛されて居つた。卽ち外國貿易は、出來るだけ輸出を超過せしめ、超過額は之を現金で收めやうといふ、所謂「貿易の順調なる均衡」favourable balance of trade の見解のため、少なからぬ制限を受けて居つたのである。輸入を制限せんがためには「高い關稅」若くは「絕對の禁止」が行はれると共に輸出の方は排戾稅・奬勵金・商業條約・植民地の建設等さまざまの方法に依つて保護奬勵されてゐたのである。

斯の如く殆んどあらゆる方面に束縛と制限が在つた。前きに述べたジェームス・ワットに關する一挿話の如き、蓋しこの間の消息を語る好例であらう。之等の環境に依つてアダム・スミスの腦裡に深く植ゑ付けられたものは、いふ

(1) Toynbee, op. cit., PP. 22—28.

までもなく「自由に對する憧憬」であつた。「國富論をしてその魔力を得しめたものは、產業自由のゴスペルである……自由の言葉はスミスの哲學に於ける最初にして最後の言葉であつた」といふアーノルド・トインビーの斷定は、決して誇張ではない。「アダム・スミスの著書の全頁が自由に對する熱情で照らされてゐる」ことも事實である。スミスは云つた「勞働組合の閉鎖的獨占權を破壞せよ、年期奉公制度を廢止せよ、之等のものは自然的自由に對する眞の侵害である。尙ほ之等と共に居住法をも全廢せよ」と。(1)

二　國富論の出現及び其影響

一

アダム・スミスが一七六四年夏ツールーズに於て、初めて國富論の著述にとりかゝつたといふことは既に述べた所である。乍併國富論は、彼れが倫敦に歸へれる後（一七六六年十一月）なほ九ヶ年以上の間、世に現はるゝに至らなかつた。此の約十年に亘る歲月は只國富論完成のために捧げられたのであつて、その間に於けるスミスの生活は、寔に人間最高の精力を傾倒せる努力の結晶であつた。彼れは約六ヶ月の間倫敦に止まり、多くの人々に接すると共に大著の資料を蒐集し、また道德情操論第三版の印刷を目にしたのである。

斯くて一七六七年五月三日倫敦を去り、故鄕カアコウデイーに歸へつた。そこには母及びダグラス孃が約三年の

(1) Toynbee. op. cit., PP. 149, 151, 153.
Price, op. cit., PP. 5—8.

間、彼れの歸國を待つてゐた。カアコウディーからヒュームに宛てた最初の手紙（一七六七年六月九日附）には、その日常生活が次ぎのやうに記されてゐる

「此所での私の仕事は研究である……。私の娯樂は海ぞひの長い孤獨な散歩である。私がどんな生活をしてゐるかといふことは大抵わかるであらう。併し私は非常に幸福であり、安樂であり、滿足である。恐らく私の全生涯に於て、これ以上の時はなかつたであらう」

スミスは殆んど六ヶ年の間、ヒュームの切なる勸誘を受けて時々エディインバラを訪問せる外、曾つてカアコウディーの地を離れなかつた。彼れの此の隱遁生活は、ダッガード・スチユアートが云つたやうに、寔に彼れの本性と彼れの最初の習慣に適なつたものと謂へるであらう。のみならず慈母と共に故郷に住むといふことは、スミスにとつて無上の幸福だつたのである。彼れは時々昔の學友と會合して研究の息拔きをする事もあつた。スミスは之等の人々との交際を樂しみ、之等の人々もまたスミスを愛した。それは唯單にスミスの態度が質朴で謙遜であつたばかりではなく、彼の幼年時代からの德行が然らしめたのである。

カアコウディーに於けるスミスの住宅は、その本町でも一流のもので、廣い丈夫な四階建であつた。間口は約六間半、庭園も廣かつた。庭園の兩側には高い塀を廻らし、北側には隣家の庭園と區切る細い人道があつた。此の家は一八四四年に取り壞はされたが、スミスの書齋であつた床の

一片は今もなほ、カアコウディーの博物館に陳列されてゐると謂ふことである。

一個の創作を世に問ふといふことは決して容易の業ではない。況して百年の生命ある著述に於て、その苦心の如何程であるかはいふまでもないことである。スミスの家庭生活が如何に幸福であつたらうとも、その研究の態度は心身を銷磨してなほ盡くさぬものであつた。玆に逸することの出來ない一つの記錄がある。それは或る日曜の朝のことであつた。深い瞑想に耽り乍ら庭を散歩して居つた寐衣姿のまゝのスミスは、いつの間にか庭を出て十五哩ばかり離れたダンファームラインの町に行つて了つた。丁度人々がかや〳〵と禮拜に行くところであつた。彼れはその騷音に依つて初めて我れに返へつたのであつた。その如何に一意專心著述に沒頭してゐたかは想察出來るのであるが、尙ほこの種の事情は、一七七二年九月五日ブートネーに宛てた書簡に依つても其の一端を窺ふことが出來る。即ちその一節に曰ふ「私の書籍は、此の冬の初め印刷にとりかゝる筈であつたが、思はぬ故障のため、なほ數ヶ月遲延せざるを得ないであらう。その故障の一部は、娛樂の缺乏と餘り一事に考へ込み過ぎることから健康を害せるためである……」と。

此の手紙の書かれた一ト月許り後、ヒュームは、著述の完成と出版に對して一通の勸告書を認めた。勿論スミスの緩慢を責めたもので、それには「若し余が君の決心を信ずる

ことが出來たならば、君の推論を容れるであらう。クリスマスの頃數週間此處に來て保養し、カアコウディーに歸へつて秋までに仕事を完成し給へ。それから倫敦に行つてそれを印刷し、此の町に歸へつて落ち着くがよい。此の町は君の勉强に適してゐる……。若しこの計畫を忠實に實行するならば、余は君を恕るさう。」と書かれて居つた。

二

斯くの如くにして日を經ること六年、スミスは拮据勵精漸く脱稿せる原稿を携へて一七七三年四月、故郷の春をあとに首府倫敦に向つた。その途中、彼れはエディンバラで一書を認め、彼れの遺言執行者たるヒユームにそれを送つた。其書簡に曰く「余は、余の原稿全部を君に依頼したのであるから、此の際余が玆に所持せる原稿を除けば後には只天文學史に關する大著の斷片以外出版に値するものは一つも殘つてゐないといふ事をお知らせして置かねばならない……天文學史の斷片も……未定稿として出版すべきか否かは全然君の判斷に委かせる。此の小著は、薄い二つ折形の稿本として書籍室の机に藏まつてゐる。尙其の机及び寢室の硝子戸入簞笥の中に在るばら〳〵の原稿全部は、同じ硝子戸の中の約十八冊の薄い二つ折形稿本と共に何等取捨することなく破棄して貰ひ度い。玆に所持せる原稿（即ち國富論）は、余が突然死ぬやうなことのない限り大切に君の許に送り屆けるやう注意する積りである」と。由是觀之當時彼れが如何に國富論のためその心血を傾けたか、ま

た如何程深い自信をそれに託して居つたかを知り得るのである。

スミスは同年五月倫敦に到着、國富論の出版後まで其處に滯在して居た。併し倫敦滯在中の記錄は、私の狹い知見の範圍では、餘り豐富ではない。只醫學教育の獨占に對する熱烈な反駁を認めた長文の手紙が殘つてゐるだけである。その手紙は彼れの友人クユーレン博士に宛てたものであつた。當時蘇格蘭の或る大學では、未熟な人間に無試驗で醫者の免許狀を授けることになつてゐたのであるがその弊害は少なくなかつた。それ故この弊害を除かうといふ請願書が議會に送られたのである。乍併スミスの見解は餘程違つてゐた。卽ち此の弊害を改める唯一の方法は、ヴイジテーションに依ることであると考へたのである。之に對してクユーレン博士は、少くとも二ヶ年以上大學の課程を修めた者でなければ醫術試驗を許さないことにしてはどうか、と提議したのであるが、スミスは之を否定して曰つた「斯樣の規程は、ハンター（當時スミスは、ギボンと共にハンター博士の解剖學講義に出席してヒユーソン、ブオーディス等のやうな全べての個人教授を壓迫する事にならないだらうか。之等の教授についた學生は、多年大學の課程を踏んだ大部分の者よりも、名譽の位階を受くる價値ある者である。人がその課程を十分に學んだならば、彼れが何處でそれを習つたとか誰に學んだとかいふ樣なことは何等問題ではない」と。

Indeed! It is true.

この最後の一齣は、我等の肺腑を衝くに足るものである。

斯様な言葉は或ひは自明の眞理に過ぎぬといふかも知れない。國富論を讀んで、それはツルーイズムの陳列に過ぎぬと云つた人さへある。「貿易を束縛しなければしない程得るところ大であらう」と云つたスミスの言葉は、寔にツルーイズムであらう。乍併この自明の眞理が實行されないために、當時の英國が少なからざる禍害を受けて居つた事實は否定出來ないのである。曾つてスミスは、ミラー出版商會の一員に宛てゝ、國富論の扉には「單にアダム・スミスと記し、その前後に何も附け加へないやうに」と申し送つたことがある。スミスはグラスゴーを去る以前既にエル・エルディーの學位を受けたのであるが、彼れは「スミス博士」と呼ばれることを嫌ひ、また自らその學位を用ひたことはなかつたと謂ふ。此の一事を以てして、既に學者としてのスミスの高風を彷彿することが出來ると思ふ。

スミスはその倫敦滯在中、常に親しく知名の美術家、科學者、文學者、政治家に交はつた。バーク、ギボン、ホレース・ウルポール、ビュークラーク、レーイノルド卿、ウイリアム・ジョンス卿、バーナードの如きその主なる人々であつた。彼れはまた一七七五年、有名なLiterary Clubの會員に推薦された。同倶樂部の會員であつたバーナードの詩に

「……

スミスは如何に考ふべきかを私に教へる……」

といふ一齣がある。

當時亞米利加植民地との問題は益々險惡を加へつゝあ

つた。植民地問題は當時の重要な輿論となつてゐたのであつて、國富論第四篇の植民政策は一七七三年から四年の間に、新たに起草されたか、でなくとも少くとも大部分が補正されたものと考へられる。勿論スミスは、グラスゴー大學當時既に植民地貿易を研究して居つたであらうが、殖民政策は彼れが辭職後に初めて問題となつたのである。さればスミスの「講義案」は、何等植民地問題に觸れてゐない。國富論の少なからざる頁を植民地問題に割くに至つたスミスの思想は、彼れが佛蘭西から歸へつた以後のものであると推測されるのである。倫敦に於けるスミスは、一章を書き終へる毎にそれを學者に示して批判を乞ひ、「全章をすつかり書き改めてはどうか」とか「その命題を放棄したらよからう」といつた樣な批評さへ、喜んで聞いたといふことである。バートンの言に從へば、國富論に記された所の亞米利加の狀態に關する精密な知識は、多くフランクリンの教示に基くものであつた。

三

倫敦に於けるスミスの滯在は次第に日を重ねた。乍去、各種の資料を接手すると共に補正の必要は益々加はり國富論の公刊は容易に實現されなかつた。一七七六年二月卽ちスミスが倫敦に上つて三年目、ヒュームが彼れに書を寄せて「君の著述は餘程以前に印刷されたにも拘はらず今猶ほ廣告さへされないのはどうした譯か。若し亞米利加の運命が決定されるのを待つてゐるならば、未だ〳〵長

く待つことになるかも知れない」と申し送つたのは、蓋しヒュームの待ちあぐんだ果てのことであつたらう。

が遂ひに翌月九日、詳しくは一七七六年三月九日、國富論は美裝せる四折判二卷となつて世に現はれた。スミスが佛國ツールーズで稿を起してから丁度十二年、今を去る百四十六年昔のことである。

三十六シリングの定價で、約一千部印刷された第一版は半歲の間に賣り盡くされた。發行者は strahn and Cadell でスミスは第一版に對して五百磅貰ひ受けたといふことである。それはスチユアートが、一七六七年「經濟原論」を書いて同商會から得たのと同額であつた。ギボンの歷史も國富論と同時に公刊された。ヒュームは、此の兩書の完成に非常な後援を與へたのであつたが、今兩書の公刊を見て如何ばかり喜んだ事であつたらう。即ち彼れはギボンに向つて「英人のペンから斯くの如き優秀な著述が生れやうとは豫期しなかつた」と語り、更にスミスに書を寄せて云つた「親愛なるスミスよ。余は君の完成を非常に喜んでゐる。それを閲讀して、これまでの大變な心配も拭ひ去られた。その仕事は君は勿論のこと、君の友人や社會からも多大の期待を寄せられたもので、余も亦その出現を非常に氣遣つてゐたが今はすつかり安心した。それを讀むと必ず多大の注意を喚び起すのであるが、社會は未だ大した注意を拂つてゐない。だから猶ほ當分の間は、最初非常に持て囃やされるやうなことはなからうと思ふ。けれども此の著述

は深遠と堅實と鋭敏を備へ、且つ珍らしい事實を以て十分に説明されてゐる。必ずや最後に、社會の注意を贏ち得べきものである。恐らく之れは、君の倫敦に於ける最後の滯在に依つて一層改善を加へられたものであらう……」と。

國富論の出版されんとするや、ジョン・プリングル卿は「貿易に從事したことのないスミス博士が此の問題を書くといふことは、丁度法律家が醫學を書くやうなもので、大した期待は出來ない」とボスエルに語つた。乍併それを傳へ聞いたジョンソンは「プリングルは間違つて居る。貿易に從事しない者と雖も貿易に就て必ず十分書き得るであらう。貿易を説くには一層哲學が必要である」と答へたと傳へられる。

ギボンは、ヒューム以上にこの新著を歡迎せる一人であつたが、彼れは之れを稱揚して「なんといふ素破らしい著述であらう、博大な科學が一卷の中に展開せられ、深刻な思想が最も明晰な國語に表現されてゐる」と叫んだ。ギボンの言葉は軈て「時の審判」に依つて確證された。傑作とか名著とか謳はれる著述は年々驚く程僅かしか增加しないものであるが、いつの間にか世界は、その小さな名著文庫の中に國富論を陳列して了つたのである。

スミスの經濟學は抽象論理の孤立的研究ではない。それは徹頭徹尾人間研究の一分科、卽ち風俗、慣習、民俗史、統治法律の批判解剖である。ウエークフィールドが云つた通り「彼れは理論を構成するために現はれたのではなく、國富

の歴史を編まんがために現はれたのである。勿論彼れは理論に終始するが、それは殆んど常に、彼れが述べた所の事實を説明するために用ひられた」のである。國富論の中には淺薄な抽象論の案山子や、陰欝科學の嘆を發せしめる小六づかしい術語の陳列は全然見當らない。經濟學が如何に冗漫であつて、缺席勝ちの教室で講義するに如何にふさはしいかといふことは、スミスの經濟學の與り知らぬ所である。それ等のすべては、何れもスミス以後の經濟學者に殘された仕事であつた。

前に述べたやうに、ヒュームは、國富論に記された珍奇な事實が軈て社會の注意を惹くであらう、と豫言したのであつたが、寔に彼れの知識はあらゆる方面に該博であつた。彼れは好んで冒險談を蒐集し、旅行家の經驗談を聞いた。されば國富論は、彼れの時代並にそれ以前の時代に於ける興味深き物語に豐富である。今それ等の二三を摘記して見ると

「蘇格蘭の一村では、勞働者が麵麭屋や酒屋へ行くのに通例金の代りに釘を持つて行くといふことである」

「十四世紀の後半に至るまで、英國に於ける石工の勞銀は教區の坊さんよりも上であつた。アンの法令にも拘らず、今日まで年二十磅の多數の牧師補が居る」

「英國で長靴を履いた最初の人はエリザベス女王だと云はれて居る。女王はそれを西班牙大使から贈られたのである」

「ジエームス一世の結婚寢臺は、王妃が國王にふさはしい贈物として丁抹から持參したものであつたが、數年前ダンフアームラインの或る酒場の裝飾になつてゐた」

「英國では居住法のために、貧民が教區の人爲的境界を通過することは高山深海を超えるよりも困難である」

「歐羅巴には倫敦ほど家賃の高いところはないが、又造作付部屋の倫敦ほど廉すく借りられるところもない」

「ブエノス・アイレスでは、四十年前、牡牛一頭の價格一志九片半であつた」

兎に角、國富論の體樣は凡そ斯くの如きもので、書かれしまさに讀まるべき書物である。されば、若し理論だけを抽出して見るならば、その滋味と魅力とは過半失はれるに相違ないのである。

國富論の結構は簡單な序論と、五編の內容から成り立つてゐる。最初の二編は大體今日の所謂經濟原論に相當するもので、卽ち第一編に於ては「生產力增進の原因及び生產物が自然に社會の各階級間に分配さるゝ順序」を取扱ひ、第二編に於ては「資本の性質、蓄積及び使用」の樣式を論じてゐる。之れを今日の術語に飜譯すれば、此の二編を以て生產及び分配の原理を構成してゐるわけである。第三編は、富の程度が國々に依て相異なる所以並に各時代に於ける各國政府の政策を考究し、此等の政策に關する經濟學說を拉し來つて第四編としてゐる。重商主義の弊竇を詳細に論

難し、重農主義の欠點を指摘してゐるのは卽ちこの第四編である。最後に第五編を國家收入論に充てゝ有名な租稅の四原則を創唱した。

乍併之等の大部分は既にグラスゴー大學に於ける「講義案」に現はれてゐる所であつて、由是觀之、國富論がスミスの胎內に宿れること殆んど二十年に及びしことを知るのである。彼れがグラスゴーを去つた後如何にその經濟學體系に補正を加へたかは、講義案の出版者たるキャナンに依つて解說された。卽ち、第一編の勞銀・利潤・地代に關する章及び終編の租稅に關する章は驚くべき進步と改善を示し第四編第九章の佛蘭西經濟學派に關するものは全く新たに增補されたものである。

四

國富論の價値は、多數の誹謗者と追隨者に依て批判された。併し多くの誹謗は殆んど國富論の偉大を證明したやうなもので、遂にこの大伽藍の根柢を覆すに至らなかつた。

スミスの社會學的體系に關する不當なる非難は、先づ歷史學派から發せられたのであるが、それは後段「スミスの科學體系」の章で述べることゝし、玆ではラスキン及び其學徒の試みたもつと無法な非難に就て一言したい。彼等は、スミスを以て只毒惡科學の創設者だと考へ、彼れを指して「思慮ある不敬」を敎へたところの「白痴な合の子スコッチマン」と呼んだ。ラスキンは、彼れの「勞働者に與ふる書簡」Fors Clavigera の中で云つた「汝は汝の上帝を憎み、神の法を罵り、

隣人の財を貪るであらう」と。また云つた「此の魔神は、蘇格蘭の哲學者の名に依て、正式にエバルの丘の上に建立された」……此の神は「暴利を許し、爭鬪を好み、人々が日曜に教會に行くことに甚だ嚴格である」と。併し之等三つのスミス神の特色は、誤謬であつた。何となればスミスは、暴利に對つて周到な警告を與へ、戰爭は人類進歩の敵なりとして極力之れを非難し、「完全なる神は、己の前に自己の創造物を卑下せしめることを期待出來る」といふ思想を否定したからである。

スミスの學說は、彼れの存命中既に鮮やかに世の注目を引いて居たが、實際政治に於ける影響は餘程後のことであつた。英本國では、ピットやエデンなど八十年代に於てスミスの政策を應用したが、それはナポレオン戰爭のために一掃されてしまつた。英國が徹底的にこれを採用したのは、一八二〇年以降一八六〇年に至る三回の關稅改革(一)(カンニングハム及びハスキッソン(一八二三―二六年)(二)ピール(一八四二、四五、四六年)(三)グラッドストン(一八五三年))以後のことであつたのである。

佛蘭西に於ける影響は、主として十九世紀初葉のことであつた。モリアンは、佛蘭西に於ける著名のスミス學徒であつたが、スミスの學說は彼れを通じて、ナポレオン財政の哲學的指導原理となつたのである。之れは恐らく、スミス歿後の勝利中、最も光輝あるものゝ一つであらう。

乍併獨逸に於ける彼れの影響は、一層重要なるものであ

つた。國富論は先づケーニッヒベルグ大學に及び、グラウスは一七八一年國富論の講義を開始した。爾後その思想は官吏階級に侵入し、東部プロシアでは多大の困難を排して、內國商業に於ける不當の課稅を撤廢した。ナポレオン戰爭の終結後は更に獨逸を風靡して、商業上の制限は逐年撤去せられ、關稅同盟は多數の反對を斥けて一大進歩を遂げた。對外關稅の如きも非常に輕減せられ、ハスキッソンが制限政策解放の賢明を例證せんがために之れを引用した程であつた。

幼稚產業保護論を提唱して、スミス主義に對抗したフリードリッヒ・リストさへ、自由貿易は英國その他發達せる國民にとつて正當な手段である、と斷言した。リストは有名な毒筆家であつたにも拘はらず、スミスの偉大な功績を認めて「彼れは經濟學に分析的方法を有効に用ひて成功せる最初の人であつた。彼れは此の方法と智的觀察力の非凡な鋭敏さを以て、彼れ以前の時代に暗黑の中に横はつてゐたところの、一科學の重要な部門を解明した。スミス以前には、唯ポリシーあるのみであつたが、彼れの研究は初めてよく經濟學なる一科學を建設するを得せしめた」(1) と賞揚したのである。

ジエー・エス・ミルの經濟原論は、國富論以後英國に於ける屈指の力作であつた。ミルは、スミスの「驚くべき成功」を承認しないではなかつたが、その原論の序文で、國富論は「大部分陳腐であり且つ全く不完全である」と斷言してゐる所を

(1) List, The National System of Political Economy, tran. Lloyd, P. 280.

見れば、彼れは明らかにスミスを蔑視してゐたものと思はれる。事實彼れの原論は、國富論に比して一層論理的であり組織的である。また誤謬や脱線が少なく、術語や定義も平易で且つ正確である。けれどもミルの用語には、往々事實を誤まらしむる危險がないではないが、スミスには絶對にそれがないと云へる。スミスはその著述のために二十年を費し、ミルは僅かに二十ケ月を與へた。表現の才と描寫の巧妙に加ふるに、彼れ獨自の雄健と論證力とを以て、スミスはミルの持ち得ないものを持つた。

スミスは、獵師のやうな態度を以て、彼れの問題を追求したと云はれてゐる。歴史、法律、哲學、文學に關する驚くべき豐富なる知識と、鋭敏なる直觀的洞察力とを以て、彼れは人間の心理を解剖し社會の機制を批判した。更らにその研究を富と其の現象に限定することに依つて、人間は一定の環境に於て如何に行動して來たか、また如何に行動するであらうか、なほ又公共財政は如何なる法則に支配されるかを詳說することが出來た。斯くの如き事情が、實に彼れをして、經濟學を有用藝術の女王たらしめ、尊嚴なる一科學たらしむるに成功せしめた秘鍵であつたのである。アーノルド・トインビーは曰つた「彼れの天稟は、觀察の廣さと迅速なること、並に例證の驚くべき豐富なるにある。……我等は彼れに於て、プラトーに於けると同樣、偉大なる見識に觸れる。その見識は我等をして、如何に考へ如何に動作すべきかを敎へるのである」(1)と。寔にスミスは、リカルドオやミ

(1) Toynbee, op. cit., P. 61.

ルに見る如き組織的著述家ではなかつた。比較、關連、調和の才に於ては或ひは彼れ以後の學者に一歩を讓つたかも知れない。乍併經濟學創掫の功は、永遠に彼れのみの荷ふべき不朽の榮譽であつたのである。

三　其人生觀と科學體系

一

國富論に現はれたスミスの經濟思想は、後年「經濟本則」と呼ばれるに至つた所の人性觀、卽はち「人間は物質を獲得せんとするに當つては、常に最小の勞費を以て最大の効果を收めんとするものである」といふ前提の上に建設された。之れがために、スミスは「彼れは人性の惡方面のみを見た」といふ非難を招くに至つたのである。乍併この結論は、スミスが利他主義を前提とせる道德情操論の著者であつたといふ別個の事實と符合しない。次に示すところは、卽はちスミスの別個の人性觀を示すものである。

「如何に利己主義の人間に見えやうとも、彼れの本性には明らかに他人の幸不幸を無視し得ない多少の要素がある。それがために他人の幸福は、假令それが彼れにとつて、只それを見るといふ歡びの外何物を齎らすものでないにしても、彼れにとつて必要なものとなるのである。我々が他人の不幸を見たり、また非常にはつきりした方法でそれを悟る場合、それに對して感ずるところの情緒の如きものは卽はち愛憐であり慈悲

なのである。……非常な惡黨であり最も頑固な社會法の違犯者であつても、全くかゝる情のないといふ者はないのである。」(1)

之れで觀ると、スミスには二個の人性觀があり、その二個の人性觀を基礎として二個の科學體系を展開したものだと斷定出來る。そこで問題は、一七五九年（道德情操論の出版）のスミスと一七七六年（國富論の出版）のスミスとの間に如何なる連絡があるか、といふことになるのであるが、この問題は最初「それはスミスが佛蘭西旅行の間に理想主義者から變じて極端な唯物主義者になつたのである」と信じられた。例へば歷史學派は次のやうに斷定したのである。

「スミスは英國に住み、ハッチエソン及びヒュームの影

(1) Reprinted in Adam Smith's Essays, Philosophical and Literary, P. 9.

響を受けてゐた以上、一個の理想主義者であつた。併し三年間佛蘭西に住み、其處に流行してゐた唯物論に接觸して歸へつてから唯物主義者となつた。彼れが佛蘭西旅行前に書いた理論と、旅行後に書いた國富論との相違は之れに依つて簡單に說明される」(1)と。

年併斯樣の斷定は、一八七七年アウガスト・オンケンの「アダム・スミスとイマニユエル・カント」(Adam Smith and Immanuel Kant)に依つて反駁された。オンケンはバックールの提唱した思想を展開して、スミスの兩著は一つの體系の夫々一部分をなすもので、決して相反するものでないことを立證しようと試みたのである。

而してその後に於ける新研究は、オンケンの試みが全く

(1) Skarzinski, Adam Smith (1878) quoted by Oncken, Economic Journal, Vol. VII. P. 445.

正確であることを裏書するに至つた。先づ第一に、スミスの講義を聽講した（一七六三年前後）學生のノートが發見されたことに依つて、此の問題は殆んど決定的の解決を見たのである。此のノートがエドウイン・キャナンの校訂を經て、一八九六年 Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms の題下に出版されたことは既に一言したところであるが、此の出版は、國富論がスミスの社會科學に於ける一分枝たるに過ぎないことを立證したのである。のみならず、グラスゴーに於ける道德哲學講義の內容は、スミス傳の最初の著者ダッガード・スチユアートに依つて既に傳へられて居つた。それに據ればスミスの道德哲學は四部より成り、第一部は自然神學、第二部は倫理學となつてゐる。此の第二部の講義を骨子として出版したものが、卽ち彼れの道德情操論に當るのである。そして第三部及び第四部は、前記キャナンの出版にかゝる講義案に相當するもので、其の內容は法律學及び政治學であつた。就中第四部は、一國の富强繁榮を計るところの行政を取扱つたもので、この部分が後年發展して國富論となり、之れに依つて初めて經濟學なる獨立の一科學が成立したのである。卽はちスミスは、國富論を出版することに依つて、當時政治法律學の中に包含されて居つた經濟問題を分離し、それに獨立の體系と組織を與ふるに至つたものである。(1)

されば スミスが佛蘭西旅行前、既にグラスゴーの敎壇に於て國富論の出發點を築いて居つたといふことは疑ふの

(1) Lectures on Justice Cannan's Preface. P. XiV.

餘地がない。從つて彼れの經濟思想が、全然佛蘭西學者の影響に據つたといふ斷定は虛妄と云はざるを得ないのである。

二

以上述べたところは、主としてスミスが如何に人性を觀たかの問題に關するものであるが、之れに續いて述ぶべきことは、スミスの二個の人性觀が彼れの社會學的體系に於て如何なる關係にあるか、といふ問題である。

此の問題の解說は、道德情操論に於けるスミス自身の言葉で與へられる。次に引用するところは、この解說に相當する彼れの考へである。

「人間社會の全べての成員は、何れも相互の扶助を必要とし、且つ亦共通の危害に曝らされてゐるものである。必要なる扶助が愛・感謝・友情・尊敬といつた樣なものから交互的に生れ出る社會は、繁榮し且つ幸福である。」

「乍併たとへ必要なる扶助が斯くの如き寬大な且つ公平な動機から生れ出ないとしても、又社會の各成員の間に相互の愛情がないにしても、社會は唯幸福と心地よさが少ないといふだけで、必しも衰亡はしないであらう。社會は相互の愛情からではなくて功利主義の觀念から、恰度各個の商人間に於ける如く、各個の人々の間に存在するであらう。そして、その社會で何等の義務を負ふべき人もなく、また或る他人への恩義で束縛される人もないけれども、社會は猶ほ且つ相互一致

の評價に從ひ金錢づくの斡旋を交換することに依つて支持されるであらう。」(1)

此の一節に依れば、スミスの考へでは、道德情操と經濟情操卽はち利他性と利己性とは、社會を結合してゐるところの二個の紐帶である。此の點に於てスミスの哲學は、希臘哲學の一延長であると見られる。猶ほまたそれは、十八世紀に流行して居つたところの自然主義思想、卽ち「自然の中には必然的に調和に向ふ一傾向がある。唯その調和は人爲的制度に依つて破壞されるのである」といふ思想に一致する所があつた。(2) 此の點に於てスミスの社會哲學は、フイジオクラートの哲學と同じ根柢に立てるものと云ひ得るのである。

(1) Smith's Essays, Philosophical and Literary, P. 78.
(2) Cliffe Leslie, The Political economy of Adam Smith, in Essays in Political and moral Philosophy. P. 154.

要之、スミスの二個の著述は、夫々その社會哲學の一部分をなせるものである。道德情操論に於ては「同情」を孤立せしめ、國富論に於ては「經濟本則」のみを取扱つて、社會の調和が如何にして可能であるかを說明したのである。されば、スミスが利己的情緒と利他的情緒とを分離して、前者の上に經濟の體系を築き後者の上に倫理の體系を樹てた事情には、矛盾もなく不思議もない。行爲の道德的標準は「他人のために多くを感じ、自己のためには少なく感ずる」(1) にあり、行爲の經濟的標準は「自愛心」乃至「利己心」にある。若し自愛心乃至利己心が、生產分配の範圍內に於ける有力な一般的動機でないならば、國富論一卷は無益な架空的力作に過ぎぬ。經濟學は、カーライルの所謂 Dismal Science に非らずし

(1) Theory of moral Sentiments. Essays, P. 24.

て Dismal Novel である。なほ此の點に關するスミスの考へは、節を改めて稍々詳細に述べやうと思ふ。

三

以上繰返し述べたやうに、人間は利己的のものであるといふ人性觀、これがスミスの經濟學を築き上げた根本思想である。今スミス自身の言葉を國富論に索めるならば、第一卷第二章に次のやうに云つてゐる。

「人間は、その同胞の助力を求める殆んど不斷の機會を持つてゐる。(併しながら)それを、唯彼等同胞の慈善心から得ようとするのは徒勞である。若し彼等の自愛心を彼の便宜に關係せしめ、彼等に要求する所のものを彼れのためになすことが寧しろ彼等自身の利益であることを悟らしめ得るならば、恐らく彼れは一層成功するであらう。或る種の賣買契約を他人に申込まうとするものは、誰しも斯樣に企てるのである。余の欲する物を與へよ、さすれば君の欲する物を得るであらう、是れがすべてのかゝる申込みの眞意であつて、我々が必要とするものゝ……大部分を得るのは實に此の方法に依るのである。我々が夕食を得るのは、肉屋酒屋麵麭屋等の慈善心からではなく、彼等自身の利益に關する彼等の尊重からである。我々は彼等の人道心を求めず、彼等の自愛心に訴へる。我々は自己の必要を述べず、彼等の利益を云爲するのである。」(1)

斯くの如くスミスは、經濟行爲の根本動機を全く人間の

(1) W. of N, Vol. I, P. 16.

利己心に置いたのであるが、勿論彼れは之れに對して何等の批評を加へてゐない。唯あるがまゝの現實をあるがまゝに認識したのである。或ひは之れに對して何等かの批判乃至非難が加へられるかも知れない。乍併かゝる非難が如何なる種類のものであらうとも、結局はゾルレンの問題となるであらう。善惡はともあれ、利己心が人間の本性であるといふ認識は、理論でなくて事實である。事實は理論を以て掩ふことの出來ないものである。

さてスミスは我々の經濟的動機を「自利心」に限定したが、然らばかゝる自利心の發動は社會に如何なる結果を齎らすであらうか、是れが次ぎに考察すべき當然の問題である。

一言にして之を云へば、彼れは自利心の自由發動を是認し、その結果は必然的に社會全體の利益を增進するに至るものと考へたのである。卽はち之れを生產方面から云へば最も能く社會の富を增進する結果となり、分配方面から云へば最も公平に富を分配する結果となるといふのである。今その例證としてスミス自身の言葉を引用せんに、先づ生產方面の一例として次の文句を上げることが出來る。

「各個人の利己心は、彼等をして自然的にその資本を、普通の場合に於て最も社會に利益ある方向に投ぜしむるに至るものである。乍併若し此の自然的選擇に依つて或る事業にのみ餘り多くの資本を投ずるならば、

夫等の事業の利潤は減少して他の事業の利潤が增加する故に、彼等は直ちにこの誤れる分配を變ずるに至る。されば何等法律の干渉がなくとも、人々の利己心は自然に彼等を導いて、各社會の資本を、出來得る限り全社會の利益に最も適合する割合を以て、その社會で行はるゝ全べての各事業に分割分配せしむるに至るものである。」(1)

猶ほ同種の意見は國富論の各所に散見し得る所であつて、殊に第四編第二章に於ては一層詳細に之れを論じてゐる。茲には一々擧證の煩を避けたいと思ふが、分配方面に於ける同種の自然的放任主義の思想は一言それに觸れて置きたいと思ふ。此の點に關するスミスの考へは、前にも

(1) W. of N., Vol. II. P. 129.

述べたやうに、各人の利己心を自由に發動せしむるを以て、公平なる分配への途であると看做したのであつた。此の意見に就ての代表的な一例は、彼れの「異なる事業間に於ける勞銀及び利潤」の章下に見出すことが出來る。

スミスの云ふ所に從へば、勞銀及利潤は同一の地方では全く同一であるか又は常に同一の傾向に進まんとしてゐるものである。若し同一地方に於て、明らかに他のものよりも利益多き又は利益少なき事業があるとすれば、多數の人は利益少き方を捨てゝ利益多き事業に集まり、其の結果特殊の利益は減じて他の事業の利益と平準を保つことになるであらう。尤も此の作用の十分に行はれるためには、その社會が完全に自由の認めらるゝ社會で、職業の選擇と

轉換とが自由でなければならぬ。斯樣の社會に於ては、全べての人は利己心の命ずる所に從ひ不利な事業を捨てゝ有利な事業に就き、勞銀乃至利潤は常に最大點と最小點の間を往復しつゝ自然に平準點に歸着せんとするものである。事業を異にするに從つて勞銀と利潤との上に著しい差異のあることは事實であるが、その相違は事業自體の特質に依るもので、夫等の特質を斟酌して比較して見れば、全べての人の勞銀乃至利潤は最も公平なる點に定まるべきものである。(1) 斯ふいふのがスミスの考へであつたのである。

之れを要するにスミスの考へは、各人の利己心を自由に働かせるならば、生產方面に於ても分配方面に於ても社會は最大の利益を享け、最も能く調和するに至るものであるといふのであつた。換言すれば彼れは自利心の自由發動を是認すると共に、其舞臺たる經濟組織をも合理的なりと見たのである。一言にして之を掩へば樂天的自由放任思想とでも謂ふべきである（但しスミスの自由主義が絶對的のものでないことは、後段政策方面の章下に詳說す）。

(1) W. of N., Vol. I, P. 101.

乍併右の如きスミスの社會的調和論は、その後の事實に依つて殆んど否定されて了まつた。その所以の一端ともの存在し難きことは認めてゐたのであるが、少くとも之を理想としてゐたことは彼れの口吻に依つて明白である）。見るべきは、スミスの考へたやうな絶對的自由なるものが、事實に於て存在し得ないといふ一事である（スミス亦かゝる絶對的自由と弱者、征服者と被征服者の對立する社會に於て、自由とい

へばそれは强者の自由であり征服者の自由であつて、弱者被征服者には壓制と拘束があるのみである。之等の事情は、スミス以後資本主義經濟組織の發達と共に次第に濃厚となり、國富論の出版後百年マルクスに依つて徹底的の批判を受くるに至つたのである。乍去私達は、この一事を以て直ちにスミスの聰明を疑ひ、國富論の價値を低下すべきものとは考へない。如何なる人と雖も、絶對に環境の支配を免れることは出來ないからであつて、前にも述べたやうに、スミスは産業革命以前の時代に人と成り、その國富論は資本主義組織の漸く生れ出でんとする時代に出版されたのであつた。さればスミスは、資本主義經濟組織に面接して深くその缺陷を見るに至らず、當時の事實に立脚して科學の體系を樹立するに至つたものである。若しスミスとマルクスとその時代を換へて居つたならば、恐らく國富論はスミスの著はす所とならなかつたであらう。不幸にして彼れの社會的調和論は机上の空論たるに終つた。乍併それはスミスのために深く咎むべきことではない。

四　其研究方法

一

スミスの經濟學體系が如何樣の研究方法に據つたかといふことは、前章の所說に依つて其の一斑を窺ふことが出來るのであるが、一層それを明瞭にするため、多少前言と重複するの煩を厭はず、茲にその研究方法の一端を述べたい

と思ふ。

前に述べたやうに、スミスは國富論に於て「經濟本則」を以て全べての立論の基礎となした。それは彼れが、人性の如何を知らなかつたためではなく、經濟本則が經濟現象に對して最も主要な影響を與へる要素であると見たからである。スミスはその分析を初めるに當つて、先づ他のあらゆる動機から經濟本則のみを抽象し、同時に經濟本則が何等の障害なしに活動しうるものであるといふ前提から出發したのである。

それ故に彼れは、第一編第六章で『一財の自然價格は生産費に一致する』ことを指摘してゐる。即ち一財の市場價格は長くその自然價格から剩離してゐることは出來ない。

一財の市場價格が自然價格の平準以上に騰貴するときは、資本家乃至勞働者はその騰貴せる財貨の生産に資本乃至勞働を投下し、從つてその財の供給が增加するところから自然に市場價格が下落することになる。反對に若し一財の市場價格が自然價格以下に下落するならば、全べての生産者は、その生産業から資本及び勞働の一部を回收することに依つて供給が減少し、從つて市場價格は再び自然價格の方に引戻されることになるのである。(1)

スミスは經濟本則に立脚して、諸種の經濟法則を推論する。乍併彼れは之等の諸法則が常に實際の狀態に符合するものでないといふ事實を十分認めて居つた。それ故に市場價格は「完全なる自由の存在する場合、即ち商人が隨意

(1) W. of N., Vol I, PP. 57-60.

にその商業を變じうる場合[1]にのみ自然價格に適合することが出來ると考へたのである。

乍併斯の如き自由の行はるゝ狀態は常に存在するものではない。卽ちスミスは謂ふ「時としては特殊の出來事により、時としては自然の原因により、また時としては特殊の制規によつて、長く市場價格を自然價格以上に保たしめることがあるのである」[2]と。例へば或る染物業者が在來の材料の半額で出來る新材料を發見し、それを秘密にして置くとすれば、少なくとも他に發見者の現はれるまでは市場價格は自然價格以上の騰貴を維持する。是れ卽ち特殊の出來事に依る場合である。また或る種の財貨が、特殊の土地に限られる場合、例へば、佛蘭西の或る地方に於ける葡萄

(1) Ibid, P. 58.
(2) Ibid, P. 26.

の如きものは、自然の原因に依つて自然價格以上の市場價格を維持する。更に一個人若くは一會社の有する專賣權、組合の獨占權、徒弟法、其他全べて或種の事業に關して、其競爭を小數者の範圍に制限せんとする法規は、何れも同一の結果を惹き起すものである。[1]

以上述べたやうな推論の方法は、國富論中至るところに之れを發見することが出來る。是れに由つて我々は、スミスは演繹の方法に依つて或る法則を樹立し、歸納の方法を以てそれを補正したものであると斷言出來るのである。

演繹法に依つて樹立された法則は、現實とは完全に一致しないものである。そこで、經濟本則に基づく方法が果して根據あるものかどうか、といふ問題が起る。此の問題は、

(1) W. of N., Vol. I. PP. 62-64.

記實的方法のみが經濟學の性質に適合するものだと主張する歷史學派に依つて論爭された。けれども歷史學派の主張は、全べての科學的研究に適合するものではない。自然科學にせよ、社會科學にせよ、夫等の打ち樹てた法則なるものは、不斷に變動する多數事實の結合であるところの現實と、正確に一致するものではない。主要な代表的事實のみを捉へて法則を組成する科學的研究は、必然的に一個の抽象法なのである。乍併斯くの如き研究の成果は、實際現象の理解を容易ならしめる點に於て、必ずしも無用の業とは云ひ得ないのである。(1)

二

經濟學の研究方法に關する二派の論爭、卽はち演繹法を

(1) Lewinski, The Founders of Political Economy, PP. 72-74.

是とするか歸納法を是とするかの主張は、今日に於ては既に決定的結論に達してゐるものと謂へるであらう。

もと演繹方法は、一個の假定に立つて現實の現象を分析解剖し、然る後之等の現象間に於ける因果關係乃至論理關係を究明するものである。反之歸納方法は、その對象たる現象を分析解剖することなく、唯現象が現實に發生して來るがまゝの狀態で之れを觀察し、單に歸納に依つて夫等現象間に存する合則性を發見せんとするものである。乍併兩者の相違は全然相反するものではなく、なほ其處に一脈の共通點を見出すことが出來る。卽はち演繹法は先づ假定に立つて推理を進めるのであるが、而かもその假定は、現實の現象を觀察し歸納法に依つて定むべきものであり、ま

た歸納法に於てもその第一歩は演繹に依らなければならないものである。假定乃至豫想を必要とすることは、兩者とも一つである。極言すれば唯何れを重しとし、何れを前後とするかの相違だけである。されば一個の研究法のみを固執して他を排斥する如きは、共に偏狹の謗を免れ難いと謂はねばならぬ。

ビーグー教授の云つたやうに、唯理主義的方法が經濟學研究の目的を達することが出來ないとすれば、現實主義的方法も亦、觀察せる事實の記實的目錄に過ぎないといふ點で同様の非難を受くべきである。現實の事實は、Reason の濾過を經て初めて科學研究の目的に役立つことが出來る。「科學は事實を以て建設される。それは家屋が石材を以て建てられると同様である。乍併事實の堆積が科學でないことは、石材を積み上げただけで家屋にならないのと同一である」（エム・ポアンカレー）。天文學は、如何なる星が如何なる位置に存在するかといふだけの目錄ではない。生物學は單に繁殖の經驗に於ける結果の記錄ではない。全べての科學は、確認しうる特殊の事實を分析解剖することに依つて、それ等の間に於ける一般的法則を發見せんとするものである。天體の運動はニュートンの法則に依つて明らかにせられ、青色アンダルーシャンの繁殖はメンデルの法則に依つて說明される。之等の法則は、唯觀察した事實だけに適用されるものではなく、未だ觀察しない事實、恐らく未だ發生しない事實にまでも、我々の知識を展開させるの

である。(1)

自然科學に於ては、例へば現實の水そのものはそのまゝ原理を構成すべき材料とはならない。學者が之を實驗室で酸素と水素に分析し、そこで初めて科學的研究の對象となるのである。社會科學に於ては、全社會を實驗室に入れてその分析を試みる如きことは固より出來得べき筈はないが、乍併學者の抽象的思索に依つて、法則を形成すべき適當な典型となすことは必ずしも不可能ではないのである。スミスが人間性の中から利己性のみを抽象した點を捉へて「複雜な動機の混成に依つて活動する人間を、單に利己的動物としてのみ觀察し、それに依つて經濟法則を推論することは無意義である」と非難する者も少くない。乍併需給

(1) Pigou., The Economics of Welfare, 1921. P. 7.

關係の如何に從つて價格が上下するといふ事實、資本は利益少なき事業から利益大なる事業に移動するといふ觀察また勞働者が勞銀の高い職業を索めるといふ傾向、之等のものは何れも人間の經濟活動が、利己性に依つて重要な影響を受けるといふことの證左でなければならぬ。ニュートンの引力法則が、唯鳥の飛ぶといふ事實又は飛行機の發明といふ現象に依つてその價値を失はないのと同樣、人間が經濟本則以外の動機に導かれる事實があつたところでそれを以て直ちに經濟學が、利己性を出發點とする研究法を用ゐてはならないといふ證明にはならぬのである。此の意味に於て我々は、經濟本則の上に經濟原理を建設し、同時に他の要素を以て補正の具に供したスミスの研究方法

を以て、直ちに左端なり邪道なりと看做すことは出來ないと考へるのである。

五　生産理論と分勞論

一

國富論は之れを一個の組織的論文として觀るならば見遁し得ない缺陷を持つてゐる。精巧な近代の科學體系から見れば、スミスの根本組織は餘まり巧妙に構成されてゐるとは謂へない。唯個々の點が如何にも精密であり、非常な注意を以て書かれてゐるのである。その最もいゝ例證は、恐らく彼れの生産理論であらう。

國富論の第一編第一章は「勞働の分割」を論じてゐる。之れは恐らく、國富論中最も有名な一章であらう。十人の勞働者が勞働を分割して從事すれば、平均一人一日四千八百本の留針を作り得るといふ留針製造の一例は、(1) 經濟學のクラシックスとして何人も熟知する所である。

乍併この分勞論をスミスの生産理論として見れば、それは極めて微弱なものである。スミスに從へば、社會の富は第一には勞働に對する熟練、技巧、判斷力の程度如何に依り、第二には有益なる勞働に從事する者の數と然らざる者の數との割合如何に依つて決せられる。土地の肥瘦、氣候の寒暖、地域の廣狹と云つたやうな事は大した問題ではなく、年々其國民の受ける物資の多い少ないは必ずや以上二個の事情に左右されるのである。乍併スミスに從へば、この

(1) W. of N., Vol. I. P. 7.

第二の事情は第一ほど重要なものではない。漁獵に依つて生活した蠻民の間に於ては、身體の健全なものは何人に限らず多少とも有益な勞働に從事し、自己の外その家族又は種族中の老幼病者等を扶養したのであつた。然るに彼等は非常に貧しく、時としてはその老幼病者を殺戮し、或ひは之れを見殺にせざるを得ないことも少なくなかつた。之れに反して文明昌榮の國民間に於ては、その大多數は全然勞働せざるのみならず、自ら勞働する者に比して十倍或ひは百倍の消費をなしてゐる。而かも社會の全產額は非常に豐富であつて、最下級の勞働者すらも勤勉なる限り蠻人社會の何人よりも裕福である。(1)

そこでスミスは右の事情、卽ち文明人の裕福といふ事實

(1) W. of N., Vol. I, PP. 1, 2.

を、全く勞働に對する大なる技巧と熟練に歸した。乍併彼れは廣汎な問題には論及せず、唯最も重要な局面たる「勞働の分割」のみを取扱つたのである。(1)

スミスは、農業に於てはその業務の性質上、工業に於けるが如く十分勞務の分割をなしえないといふことを認めて居つた。(2) さればスミスは、この一事を以てしてもその生產理論の全體を「分勞論」に包容することの不當を悟らねばならなかつたのである。フィジオクラートが、社會の安寧は純生產物 net produce の大小に基くと力說したことは、寔に至當であつた。彼等は農業に於ける餘剩額の根源を論ずるに際して、機械肥料排水裝置等の形式に依る放資が如何に土地の生產力を增加するかといふ點を考究したのである。

(1) ibid, P. 5.
(2) ibid, P. 8.

然るにスミスは、全然之等の問題に觸れなかつたのであつて、此點に於て彼は、生產理論を論ぜずして單に「勞働の分割」に關する一論文を書いたものと謂ひ得る。(1) 乍去彼の分勞論は、イングラムに從へば實に「比類なき解釋」なのであつて、經濟學史上常に卓越なる地位を占むべきものである。(2) されば以下稍〻詳細に亘つて分勞論を紹介し、併せてその價値如何を述べて見たいと思ふ。

二

スミスは國富論の劈頭に於て、諸國民の富はその根源を勞働に發すると斷言した。卽ち彼れは謂ふ「各國民年々の勞働は、國民が年々消費する生活必需品並に便宜品を供給する資源である」(3) と。而して勞働の生產力は、前述の如く

(1) Lewinski, op. cit., PP. 76-78.
(2) Ingram, A History of P. E., 2 nd ed., P. 94.
(3) W. of N., Vol. I, P. 1.

主として勞働に對する熟練、技巧、判斷力の程度如何に依つて決せられ、熟練、技巧、判斷力の大部分は「勞働の分割」に基くものである。(1) そこで彼れは、國富論の第一編第一章を分勞論に宛てたのであつた。

スミスは分勞の概念に對して何等明確な定義を下さなかつた。唯「特殊の製造業に於て、それが如何なる方法で行はれてゐるかを考察することに依つて」最も容易に分勞の効果を理解出來ると述べてゐる。その所以は、大なる製造業では分割された勞務の全體を同じ工場に集合しえないため、從つて分勞の狀態を一目の下に觀察し得ないからである。(2) 次に引用するところは、前に一言せる留針製造業に就てのスミス自身の言葉である。

(1) ibid, P. 5.
(2) ibid, PP. 5-6

「留針製造の業務(勞働の分割に依て各個別々の業務になれる)に關して教育を受けない者、またそれに用ひる機械(その發明も恐らく同じ勞働の分割に依つて齎らされたものであらう)の使用に習熟しない者は、如何に努力しても一日一本の留針を作ることは困難であらう。況して一日二十本を作ることは到底不可能である。乍併、今日この業務の行はれてゐる方法では、曾に其の仕事全體が特種の職業であるのみならず、更にそれは幾多の部門に分たれ、その部門の大部分も亦特種の職業となつてゐるのである。一人は針金を引出し一人は之れを引伸し、三人目は之れを切り四人目は之れを尖らし、五人目は頭を附けるために天邊を磨く。

頭を作るにもまた二三の手數を要する。頭を附けるのは特種の業務であり、留針を白くするのは又別の業務である。紙に包むことさへも一個の職業である。

一本の留針を製造するに就ての重要な業務は、斯くの如くにして約十八種の作業に分たれる。……余は曾つて僅か十人を使用する小さな留針製造所を見たことがあるが、そこでは小製造所のこと故、或る職工は二三種の作業を兼任して居つた。彼等は非常に貧しく、ために必要な機械を十分設備することが出來ないにも拘はらず、彼等が努力する時には一日約十二封度の留針を作ることが出來た。一封度の留針は、中型のものの四千本以上を包含するのである。されば之等十人の

者は、一日四萬八千本以上の留針を作り得るのであつて、……一人宛て一日四千八百本以上を作ることゝなるのである。乍併若し彼等が個々獨立に作業し、また此の特種の業務に對して教育を受けなかつたとすれば、彼等は一日二十本はおろか恐らく一本さへ作り得なかつたであらう。」(1)

多くの製造業の中には、留針製造業に於ける如く必ずしも多數の單純勞働に分割し得ないものもある。乍併分業の結果その生産力を增大しうる一事に至つては何れも變らない。各種職業の分立も矢張りこの原理を應用したものに相違なく、進歩せる社會では農夫は只農夫であり、製造業者は只製造業者たるのみである。のみならず一つの完

(1) W. of N., Vol. I. PP. 6-7.

成品を生産するに要する勞働も亦必ず多數の手に分割されるのであつて、例へば麻の栽培からそれを漂白しそれを滑らかにするまで、羊毛の生産からそれを染めそれを衣服に仕立てるまで、極めて多くの階段を經過するのである。(1) 斯くてスミスは「文明國に生存する以上假令如何なる賤民と雖も數千人の扶助と協力なくして生活なし得ない」(2) と結論したのである。

分勞論はスミス以後多數の經濟學者、特にマルクス、ビュッヘル等に依つて一層精緻な說明と詳細な比較分離若くは廣義の觀察を試みられた。乍併スミスの根本思想そのものに至つては、何等の斧鉞を受けてゐない。産業組織もスミス以後著しく複雜となり、分勞の原則は一工場內に組

(1) ibid, P. 7.
(2) ibid, P. 14.

織的に應用されるに至つたのみならず一面地方的に分化され、他面國際的に連絡せられて相互依立の關係は益々擴大された。乍併スミスの擧げた分勞の利益乃至分勞の限界は、今日と雖も依然として眞理である。

三

スミスの指摘した分勞の利益は三個である。

先づ第一に分勞は、勞働者の技巧を增進せしめる。(1)詳言すれば分勞は、各人の業務を最も單純な作業となし、且つ生涯その作業に携はる結果必然的に勞働の技巧を增進せしめるといふのである。此の論點に關する現代經濟學者の所見如何といふに、例へば英國の碩學マーシアル博士は謂ふ「練習は事物を完成せしめるといふ事實、練習は最初困難

(1) ibid, P. 9.

に見える作業をも一時の後は比較的僅少の勞力を以て容易に之れを行はしめ、且つ從來よりも一層完全に行ふを得しむるに至るといふ事實、之等は何人も熟知する所のものである。……アダム・スミスは云つた。毎日釘の製造に從事せる少年は、たまに釘の製造に從事ずる一流の鍛冶屋よりも二倍の速度を以て釘を作ることが出來る、と。(寔にその通りであつて)毎日同じ作業に從事し同じ形の品物を作る人は、誰しも漸次その作業に習熟し、殆んど自動的の働きと非常な迅速とを以てその手指を欲するまゝに働かしうるに至るものである。而してその迅速なことは、意志の愼重な指示を待つて初めて行はれる運動に比すれば殆んど比較にならない程である」(1)と。之に依つて考ふるに、ス

(1) Marshall, Principle of Economics, 5 th ed., PP. 250, 253.

ミスのこの論點は今日と雖も動かすことの出來ない斷定たるを知るのである。

次にスミスは「勞働を容易ならしめ又それを短縮せしめる機械の發明は、もと分勞に負ふものである」[1]として之れを分勞の一利益に數へた。蓋し分勞の結果、人は常に特種の勞働に注意を集中するが故に、その作業に改良の餘地の存する限り、それを行ふに最も容易な方法を發明するに至るのである。次に示す文句は、スミスがこの理を說明するために引用した實例である。

「最初火機 fire engines の發明された頃にはそれを使用する際、ピストンが上下するに從つてボイラーとシリンダーとの通路を開閉するため、常に子供を雇用したのであるが……之等の子供の中の一人は、この通路を開くバルブの柄から機械の他の部分に紐を結び付けたならば、バルブは人手を借らずに開閉するであらうと考へ付いた。かくて火機發明以來の一大改良は、一人の子供がその勞を省かうとする動機に依つて成し遂げられたのである。」[1]

或はかゝる斷定に對して「機械の改良は其使用者に依てのみなされたのではなく、機械製造家の天才または哲學者思索家に依つて工案されたものも少なくない」といふ反對があるかも知れない。そこでスミスは答へる、之等の場合と雖も矢張り分勞の結果なのであつて、機械の製造といふことも分勞の結果として特種の職業となり、哲學乃至思索

(1) W. of N., Vol. I, P. 10.

(1) W. of N., Vol. I, P. 11,

といふことも社會の進歩と共に主要な職業たるに至つたのである……と。(1)

機械の改良發明は、更に他の見地から云つても矢張り分勞の結果に歸することが出來やう。卽ちそれは、スミスが分業の一利益として擧げた「一つの仕事から他の仕事に轉ずるために失はれる時間の節約」(2)に基くのである。この時間の節約に關して、彼れは次のやうに說明してゐる。

「全く違つた工具を以て違つた場所で行はれる一つの仕事から、他の仕事に轉ずることは決して迅速に出來ない。……二つの職業が同じ仕事場でなされ得る場合でさへも、時間の損失は勿論前より少ないには違ひないが、可成り大きいといはねばならぬ。(何となれば)、

(1) ibid, P. 12.
(2) ibid, P. 10.

何人と雖もその手を一つの作業から他の作業に移すに當つては、多少躊躇するのが普通だ(から)である。」(1)

この論點に就ては、スミス以後の學者中他の觀察を試みた者もないではない。例へばジエー・エス・ミルは「アダム・スミスが分勞から起る第二の利益として擧げたもの(卽ち時間の節約)は、スミス及び他の人々に依つて、餘まり高調され過ぎたと考へざるを得ない。……余は、そこに看過すべからざる反對の考察があると思ふのである。若し筋肉的乃至精神的勞働の一種が他種のものと異なるならば、それを去つて他に就く時は幾分かの休息となるは明かである。第二の職業に於て、直ちに大なる元氣を得ることが出來ないとしても、無制限に第一の職業を續けんか必ずやエナヂ

(1) W. of N. Vol. I, P. 10.

ーの頽廢を免れない。勞働者に十分の休息が必要な場合、仕事の轉換は屢々休息を與へるであらうといふこと、並に始終一業に止まるよりも職業を連鎖する方が、疲勞することなくして長く働き得るといふことは、普通經驗する事柄である。……また一つの職業から他の職業に速やかに轉ずることの習慣も、他の習慣の如く速やかな敎養に依つて得られるに相違ない。而してそれが得られた場合には、スミスの述べた「躊躇するといふこと」はなくなるのである」(1)と述べてゐる。かゝる觀察の眞理であることは云ふまでもない所であつて、或ひはスミスに數歩を進めたものとも云ひ得るであらう。乍併この一事を以て直ちにスミスを誤れりとすることは出來ない、卽ちスミスにも一理はある

(1) J. S. Mill, Principles of P. E., ed. Ashley, PP. 125-127.

のであつて、況んや之れを以て分勞論の價値を覆ふことは出來ないと思はれるのである。

なほ轉業に要する時間の節約といふことの外に、分勞に依れば職業習得の時間をも節約することが出來る。何となれば、分勞が行はれゝば、全體を習得する代りに一部の知識を得ればよいからである。更らにまたスミスの此の論點を機械そのものゝ方面に應用するならば、分勞に依つて機械を無駄に遊ばせることなく、且つ餘剩時間を以て機械の改良發明をも促し得るであらう。セニオルが、與へられた一つの結果を生むに要すると同じ努力は、同樣な百千の結果を生むに十分である、と云つてゐる點から見れば、茲にも分勞に依る時間の節約を見出し得る次第である。(1)

(1) Senior, Political Economy, P. 74. Quo. Price's History, P. 23.

四

スミスの云へる「勞働の分割」が行はれるためには、一定の條件を必要とすること明らかである。即ち勞働の自由と交換の自由とが必要である。人々は居住法、徒弟法、組合の獨占權の如き拘束に左右されることなく、自己の最も適當せる仕事に從事し、また自己の生産品乃至餘剩品を以て、他人の所有品と自由に交換することを許されねばならぬ。交換の自由が擴大されるならば、それに從つて、個人は最も便利であり且つ安全とする所の特殊な職業に勞働を投下し、それに依つて生産された財は、益々大なる需要を受くるに至るであらう。それ故に交換乃至勞働の自由が束縛されゝば分勞は發達せず、之等の自由が許されゝば其の程度に應じて分勞は發達するのである。

そこでまた勞働の分割は、市場の範圍に依つて制限せられる。換言すれば分勞の範圍は市場の範圍と同一である。市場の狹小な場合には、何人も自分の生産餘剩品を以て他人の餘剩物と十分交換することが出來ない。ために人々は一種の職業にのみ專心することが出來なくなり、勞働の分割は不可能となるのである。(1)

右の原理から考へ得られるやうに、分勞の範圍は都會よりも田舍の方が餘程狹隘である。「蘇格蘭のハイランド地方のやうな荒凉たる村落では、全べての農夫は何れも其の家族のために肉屋となり麵麭屋となりまた酒造家とならねばならぬ。斯樣の場所では、鍛冶、大工、左官の如き者さへ、

(1) W. of N., Vol. I. P. 19.

他の同業者のある二十哩以内の地には殆んど見出し難いのである。[1]されば田舍の勞働者は、同種の材料でなしえられるあらゆる業務に從事せざるを得ないのであつて、大工は木を用ふる仕事ならば何んでもやり、鍛冶屋は鐵で作られる仕事は全べて行ふのである。

なほ、陸上の運輸に加ふるに水運の便があれば、市場は一層擴大せられる。それ故に多くの工業は、自然に海岸又は河岸に發達し、内陸地方に於ける進歩發達は非常に後れるのが通例である。[2]

以上述べた所に依つて、スミスの分勞論を大様説明し得たと思ふ。これに依つてわかるやうに、彼れは分勞の利益を説くに急であつて、殆んどその不利益には言及しなかつ

(1) W. of N., Vol. I, P. 20.
(2) ibid.

た。尤も第五編に至つて此の點に觸れてはゐるが、それは義務教育の必要を説くために附隨的に論ぜられたのである。これは恐らく彼れの時代に於て、分勞はなほ十分の發達を見ず、從つてその不利益の點も顯著でなかつたためであらうと考へられる。

そこで極めて卑近なものではあるが、その不利益の二三を擧げて見度い。

先づ第一には、分勞が發達すると共に技術が一方的になるため、勞働者は技術的不具者となり、職業の轉換を不可能にするといふ一事である。マーシアル博士が「機械の使用が進むと共に、一般的判斷力並に智力の必要は益々大となる」[1]と述べてゐるところを見れば、分勞と雖も矢張り一種

(1) Marshall, op. cit., P. 258.

の循環法則に支配せられて、その利益に依つて齎された結果が次には「不利益」となつて、その無制限の發展を阻止するに至るのである。第二には、分勞の結果單調な同一の作業を繰返へすために、倦怠または不健康を招くことに依つて却て勞働生産力を減少せしめる一事である。この點は、前にミルの所說を引用したことに依つて既に明らかであるが、之れに就てはスミス自身にも多少の用意があつたやうに考へられないではない。即ち彼れは、文明社會に於て或る個人の職業が單調にならうとも、全社會の職業には殆んど無限の種類がある、と述べてゐるのである。寔に人間の勞働が、全然筋肉勞働にのみ限られるならば、「單調」は恐らく耐へ難い苦痛であらう。乍併若し勞働が比較的精神勞働を過分に含んでゐる場合ならば、「單調」の苦痛は左まで大きくはないであらう。而して勞働の分割が、漸次筋肉的のみの勞働を減せしめる傾向のあることは事實であつて、筋肉的勞働の負擔すべき部分（勿論全部ではあり得ないが）は機械に依つて代用されるのである。

猶ほ分勞の弊害に關しては、社會主義的論者が一層辛辣な指摘を試みてゐるのであるが、それ等の點は他の機會に讓り、次にスミスの資本觀に移り度いと思ふ。

六　資本理論

一

國富論に現はれたスミスの資本觀は、フィジオクラート

と同樣、三種に分たれる。卽はち(一)生產手段としての資本、(二)勞働者の生活資料としての資本、(三)所得の根源としての資本、これである。

スミスは資本理論のために國富論の第二編全部、卽はち約百頁の紙面を費した。乍併多くの點に於て、極めて僅少の紙數を費した所のフィジオクラートの資本理論に劣ると稱せられる。また研究の範圍を明確に限定した點に於ては、チュルゴーに一歩を讓るとさへ謂はれて居る。(1)

そこで今、暫らくスミスを離れてフィジオクラートの資本理論を簡單に述べて見ようと思ふ。フィジオクラートの經濟體系に於て、最も獨創的な部分は資本理論であつた。(2)社會を分つて生產階級(Classe Productive)不生產階級(Classe

(1) Lewinski, op cit., P. 78
(2) Physiocrates の學說並に引用書は Lewinski's Quatation に據る

Stérile)有產階級(Classe des Propriétaires)の三者としたことは、既に カチロンの「一般商業本質論」Essai sur la Nature du Commerce en général 1755? に見出される所であり、貨幣を以て「富を構成するものにあらず、單に交換の媒介物である」とした點は、既に多くの先人に認められた所であつた。乍併資本理論のみは、純粹にフィジオクラートの發見であつたのである。此事實は往々世人の看却乃至輕視するところであつて、(1)スミスを以て資本理論の創始者であると見る人さへないではない。乍併之れは明らかに誤解であつて、寧ろスミスは、その資本理論をフィジオクラートの「前拂ひ」avances の觀念から得たのである。デーアーは、フィジオクラートの avances とスミスの capital とが同義語であることを指摘し、(2)マルク

(1) Böhm-Bawerk Kapital und Kapitalzins, 2 nd ed., S. 24.
(2) Daire, Oeuvres des physiocrates, Vol. I, P. Xiii.

スも亦、資本理論に關するスミスの功績はフイジオクラートの發見を嚴正な術語に代へた點にあると述べてゐる。(1)

フイジオクラートの資本理論は、農業に於ける各種の方法を論ずる際、それに關連して創唱された。十八世紀初葉の佛蘭西には「小農法」Petite culture と「大農法」Grande culture と稱する二種の主要な耕作法が行はれてゐた。小農法は主として南部佛蘭西に發達し、收穫物を地主と百姓との間に分配する所謂分益農法 métayage であつた。斯くて小農法に於ては、地主が耕作に要する全べての「前拂ひ」をなしたのであつて、例へば勞働用の家畜、鋤犁その他の農具、種子、百姓の生活資料等を給與したのである。大農法の方は北部佛蘭西に行はれたもので、其處では富有な小作人が年々一定の所

(1) Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. I. S. 34.

得を地主に拂つて、耕作に從事したのである。

小農法は、大農法に比すれば收穫が少なかつた。そこで「其の原因が何處に在るか」といふ問題が生れたのである。ケネーは大百科辭典のために書いた論文「小作人」Fermiers の中で、此の原因を「大農法では土地を耕すに馬を用ひ、小農法では牛を用ひるからである」と述べてゐる。併しチュルゴーは此の說明に同意せず、耕作に用ふる牛馬の如何に依るよりも、彼の所謂 avances の使用に基くことを立證しようと試みたのである。(1)

avances は、財の生產に必要なところの全べての豫備的勞働である。卽ちチュルゴーは謂ふ「假令自己の手を以て耕作するとしても、刈り入れ以前に種子を蒔くことが必要で

(1) Schelle, Turgot, 1909, PP. 103, 104.

あり、次の收穫まで生活を支へることが必要であらう。土地の耕作が完全でありきび〳〵して居れば居るほど、之等の前拂ひは大である。家畜、農具、家畜を飼ひ生産物を貯藏する建物、の必要があり、また事業の範圍に應じて人々に支拂ひをなし、そして收穫まで彼等を生活せしめることが必要である」(1)と。

之等の前拂ひが卽ち大農法に於て生産力の大なる所以であつて、「大なる報酬を獲得し、また土地が大なる所得を生産するのは、大なる前拂ひの方法に依るのみである」(2)とチュルゴーは說明してゐる。この資本の生産力に關する理論は、ケネーに於ても亦同樣であつた。卽ち彼れは曰ふ「國家に必要なのは、さまで多くの人間ではなくて富である。

(1) Turgot, Réflexions, § Iii.
(2) ibid.

富が耕作に用ひられる時は、土地に必要な人間は極く少數であつて、また斯樣の時に農業が繁榮し一層大なる所得を齎すのである」(1)と。ボードーも同じやうな立場から、前拂ひは勞働の節約であることを指摘し「四頭の馬を使用する立派な耕作は、十人の人間が唐鍬を以てやるよりも、もつと廣い土地を一日で耕作出來る」と述べてゐるのである。(2)

斯の如き avances は、生産過程を長からしめ、消費を延滯らしめるのであつて、それが卽ち耕作夫をして生活資料を蓄積せしめる所以である。「最初の耕作夫は、地球の生産せる植物から種子を取つて、それを蒔いた。そして收穫を待つ間は、漁獵若くは野生果物で生活した。その工具は、森で引き裂いた樹の枝であつた……」。(3) 乍併社會の進步と職

(1) Oeuvres, P. 333.
(2) Daire, op cit. Vol. II, P. 824.
(3) Turgot, op. cit., § Iiii.

業の分立に伴ひ、多くの人々が唯自己の手に依つてその生活を支へなければならなかつた時「勞銀で生活しなければならない人々は、勞働すべき材料や勞銀を拂はれるまでの生活資料などを、前借しなければならなかつたのである。」(1)

原始草昧の時代に於ては、勞働者の生活に必要な之等の豫備品は、食物と原料の形式で保存された。乍併「彼等の蒐集した生産物が保存し難くなつた時、彼等はそれと交換に、時間に依つてその價値の破壞されないもつと永續的性質の品物を索めなければならなかつた」。(2)而して年々の生産物を蓄積して得たところの之等の所有物は、チュルゴーに依れば、それは「動産」richesses mobiliaires と名附けられる。斯樣の時代に於て間もなく人々は、「貨幣が……全べての物の

(1) ibid, § Iix.
(2) ibid, § xIix.

中で最も變化しないものであり、また保存するに最も容易なものである」ことを認識するに至つたのである。

之等の蓄積された富を名附けて、チュルゴーは資本と呼んだ。即はち彼れは曰ふ「自己の手で得る所得からであれ、勞銀からであれ……兎に角費消するに必要なよりもヨリ以上の價値を年々收受する人々は、この餘剩物を保留し又は蓄積するであらう。之等の蓄積された價値は、即ち資本と呼ばれるのである」(1)と。

チュルゴーの資本觀は、後にスミスの國富論に現はれたところと同樣(一)勞働用具としての資本(二)勞働者の生活資料としての資本(三)分配の一要素即ち所得源泉としての資本の三種に區別せられ、ケネーの「經濟表」Analyse du Tableau

(1) ibid, § Iviii.

économique では(一)Avances foncières 卽ち地主が土地耕作のために投ずる資本(二)Avances annuelles 卽はち勞銀、種子の如き年々繰返し投じられねばならぬ資本(三)Avances primitives 卽ち手押車、水壺、溫室等の如き年々投下するを要しない比較的永續する資本の三種を擧げてゐる。(1)

二

スミスの資本論は、生産理論として說いたものではない。彼れの資本論は前にも述べたやうに、國富論第二編に現はれてゐるのであるが、其處での所論は主として所得源泉としての資本を取扱つてゐるのである。

彼れの用ひたストックといふ言葉は、往々キャピタル(資本)と同義語に解釋せられ、ストックに對してキャピタルと同樣「資本」の譯語を當て嵌める者もないではない。之は固より誤解ではないのであつて、スミスは國富論第一編に於ては今日の企業資本の意味でストックの語を用ひ、また第二編に於ても第一章以外に於ては少くともストックとキャピタルとを嚴格に區別して使用したものとは考へられないのである。乍併兎も角彼れ自身は、國富論第二編に入つて直ちに兩者の區別を說いてゐるのであつて、卽はち彼れに從へば、資本とは所得を得んがために用ひられるストックの部分を意味する。今この部分に關するスミス自身の言葉を引用すれば

「人の所有するストックが、僅かに數日若くは數週間を支へるに過ぎない場合には、それに依つて所得を得よ

(1) Lewinski, op. cit., PP. 42-58, 78.

うする者は稀である。……乍併彼れが若し數ヶ月若くは數年を支へるに充分なストックを有する場合には、彼れは自然にそれの大部分から所得を得んと努力し、唯この所得が這入るやうになるまで生活を支へるだけのストックを直接消費のために保留するのである。それ故に彼れの全體のストックは、二つの部分に區別せられるのであつて、(之等二つの部分の中で)彼れが所得を得んとする部分、それが卽ちキャピタルと稱せられるのである」[1]

スミスの用ゐたストックの意味は、前に述べたチュルゴーの「動產」richesses mobiliaires に一致する。スミスに從へば、社會の未だ幼稚な時代に於ては事業を營まんがために豫

(1) W. of N. Vol. P. 261.

めストックを蓄積する必要はなかつた。何となれば、若し人が空腹になつた場合には、「彼れは森に行つて獵し、衣服の破れた場合は最初に殺した大きな動物の皮を以て自ら裁縫し、小屋が朽ち初めた場合は附近の樹木や泥土を以てそれを修理」[1]したからである。乍併一度び分勞の行はれるに至れば右の狀態は忽ち變化し、多くの人々は他人の生產物を購買してそれに依つて自己の需要を滿足せしめねばならぬ。けれども他人の生產物を購買するためには、先づ自己の生產物を完成させた上、なほその生產物を賣却することが必要である。されば人々は、之等の必要を遂げる時期まで、自己の生活を維持し、勞働に要する器具材料を供するに足る各種の財のストックを貯藏しなければならぬ。

(1) ibid. P. 258.

例へば「一人の機織りは、彼れがその織物を完成し、それを賣却するまでは、自己の所有であれ或ひは他人の所有であれ、兎も角彼れの生活を維持し、その勞働の材料及び工具を給するに足るだけのストックを、前以て何れかに貯藏するにあらざれば、彼れは特殊な業務に全然沒頭することは出來ない」(1)のである。

斯樣にストックの蓄積は勞働の分割に先き立たざるを得ないのであるから、從つて蓄積されたストックの增大すると共に勞働の分割は益々微細となり、勞働の分割が微細となると共にその生産力は增大する、約言すれば『ストックの增大は生産力を增大せしめる』(4)といふのがスミスの考へだつたのである。

(1) W. of N., Vol. I, PP. 258, 259.
(2) ibid, PP. 259-260. id, P. 2.

以上述べたところに依つて、ストックとキャピタルとの區別(詳言すれば、スミスがストックを分類して(一)貨幣を得んがために事業に投ずる部分と(二)自己消費のために保留する部分との二つとし、前者を指してのみキャピタルの呼んだこと)は大樣理解出來ると思ふ。勿論斯の如くに兩者を區別することの適否に就ては、なほ吟味すべき餘地がないではない。(1)乍併その詳細に亘る點は他の機會に讓り、唯茲では右の兩者を區別したゝめに、それから導かれたスミスの他の理論に甚だしい渾沌を來たしてゐる一點を指摘して置きたいと思ふ。

スミスは後章に至つてストックなる語に代へてキャピタルなる語を用ひ、次のやうな斷定をなしてゐる。

(1) Cannan, op. cit., P. 59.

「或る國民の土地又は勞働から齎らされる年々の生産物は、生産的勞働者の數を增すか、若しくは前から使はれてゐた勞働者の生産力を增すかでなければ、他にそれの價値を增す方法はない。生産的勞働者の數は、キャピタルの增加する……にあらざれば決して增加しえないこと明かである」(1)

この術語の變化、卽ちストックをキャピタルに代へたことは一見なんでもないやうではあるが、スミスが生産的勞働と不生産的勞働とを區別した理論に少なからざる影響を及ぼしたのである。卽ちスミスは、ストックと生産力とを關連せしめる場合には「一國民の富を增加するところの物質的行程」を心に置き、キャピタルと生産力とを關連せしめる場合には「所得を齎すこと」を以て生産力の特色と考へて居つた。そこで彼れは、この二つの問題を混同し、その結果生産的勞働と不生産的勞働との區別を渾沌たらしむるに至つたのである。

(1) W. of N., Vol I, P. 325.

スミスに從へば、勞働には二個の種別がある。卽ち一つはその働きかける目的物の價値を增加するものであり、他は斯樣の結果を齎らさないものであつて、前者は之れを生産的勞働と云ひ、後者は不生産的勞働と名付けられる。例へば製造家の勞働は、勞働材料の上に自己の生活費と雇主の利潤に相當するだけの價値を加へるものであるから、之れは生産的勞働に屬し、卑僕の勞働は何等の價値を加へないものであるから、不生産勞働なのである。(1)

(1) W. of N., Vol. I, P. 313.

卽はち利潤を齎すか否かに依つて、或る種の勞働は生產的であり、或る種の勞働は不生產的である、とかうスミスは明言したのである。然るに彼れは同一の頁に於て、全く別の標準を基礎として勞働を二種類に分つた。卽ち謂ふ「製造家の勞働は、その勞働の過ぎ去つた後少くとも暫らくは存續するところの或る特定の目的物乃至商品に勞働それ自身を固着し實現するものである。それは恰かも、他日必要の場合に使用せんがために勞働の一定量を貯へるやうなもので、その目的物……若しくはそれの價格は、必要な場合にはそれを最初生產するに要したところの勞働と均しい勞働量を働らかせることが出來る。之れに反して卑僕の勞働は、或る特定の目的物乃至商品に固着しまた實現することなく、概してその勞働は爲された瞬間に消滅し、夫等の背後に何等かの痕跡また價値を殘すこと稀である」(1)と。

スミスは、帝王も文武の百官も、また說敎師、法律家、文學者も、更に俳優、幇間、樂師、歌妓、舞踊家等もすべて不生產的勞働者に加へる。何となれば之等の職業は、何等の物質を生產せず、その行はれたる瞬間に消滅すべき性質のものだからである。(2)

以上スミスの所說に依つてわかるやうに、彼れは「永續的物質の生產」と「所得構成の過程」とが全く別物であるといふことを認識しなかつた。旅館の料理人の勞働は、下女下男の勞働よりも永續的ではなく、且つスミスに據れば下女下男の勞働は不生產的勞働なのである。從つて彼れに據れ

(1) ibid, PP. 313-314.
(2) W. of N., Vol. I, P. 314.

ば、料理人の勞働も當然不生產的勞働でなければならぬ。乍併我々の見解を以てすれば、料理人の勞働は雇主に利潤を齎すのであるから、資本主義的立場から見ればそれは明らかに生產階級に屬すべきものと考へられる。卽はちマルクスの云つたやうに「劇場、音樂堂等の所有者は一時の間、俳優や音樂家の勞働を處分すべき權利を買ひ取る……彼れは所謂不生產的勞働、卽ちその勤勞が生產の瞬間に消滅し或る特定物乃至商品にそれ自身を固着せずまた實現もしない勞働を買ひ取るのである。乍併之等の勤勞を公衆に賣れば、それは前拂ひの勞銀を雇主に償ふのみならず、更にまた利潤を齎らすのである。」(1)

スミスは、生產理論に於ける資本觀念と分配理論に於ける資本觀念とを樹立するに於て、決して成功したとは考へられない。生產的勞働と不生產的勞働との間に一つの限界線を引き、それに依つて永續物を齎らすものと否らざるものとを劃し、同時に所得を生むものと否らざるものとを分たうとした試みは均しく失敗であつたと云ひ得る。而して斯の如き失敗は、所得構成の行程と富の生產とが別物であるといふ事實を無視した結果なのであつて、この點はキャピタルとストックとを區別するに於て既にその源を發してゐたと考へられるのである。(1)

(1) Marx, op. cit., S. 271.

三

スミスは資本の本質を說明せる後、その問題を彼れの所謂「社會資本」The capital of a society の理論に轉じた。卽ち「一

(1) Lewinski, op. cit., PP. 83-87.

國若しくは一社會の總ストックは、その全住民乃至全員の有するストックの全部と同一であるから、當然同じ三部分に區分され、それ〴〵別個の職能又は役目を有つ[1]と述べて、之れを次ぎの三種類に分類したのである。

一は直接消費のために保存される部分で、その特質は何等の所得または利潤を生ぜざるにある。例へば消費者に購買せられて而かもなほ全く消費されて了はない所の食物、衣服、家具等のストックが之れに當る。

二は固定資本で、その特質は流通卽ち所有主を變更せずして所得または利潤を生ずるにある。

三は流動資本で、これは流通卽ち所有主を變更することに依つてのみ所得を生ずるものである。[2]

(1) W. of N., Vol. I, P. 263.
(2) ibid, P. 264.

而して、固定資本と流動資本の兩者は、次の諸部分から成立する。

一 固定資本

(1) 勞働を容易にし且つ省略せしめる所の職業上の一切の有用なる機械器具

(2) 店舗、倉庫、仕事場、農場建物の如き、所得を生ずる手段となる所の利益ある一切の建造物

(3) 開拓、排水、圍檣、施肥の如き土地の諸改良

(4) 一社會の全住民または全員の習得せる有用な才能

二 流動資本

(1) 貨幣

(2) 牧畜者、屠殺者、農業者、穀物商、釀造家等の所有にかゝる

食料貯藏品

(3)全くの原料たると多少加工されたるとを問はず、未だ完成に至らない所の衣服、家具、建物等の材料

(4)消費者に賣却または分配されないで、商人または製造家の手中にある所の完成品(1)

右の如くスミスは、機械または建造物のみならず貨幣、才能の類に至るまで之れを社會資本の中に列擧したのであるが、何故にかゝる種々雜多な物を社會資本に包括せしめたかといふ點に就ては、茲で一應吟味する必要があらう。而して此の事情は、彼れが「所得源泉としての資本」と「生産手段としての資本」とを連絡せしめようとしたゝめであると考へられるのであつて、則ち機械器具排水等が勞働生産力

(1) W. of N., Vol I, PP. 264-265.

を增加せしめる事實と資本が其所有主に所得を齎らす事實とを照合して、之等兩現象の間に必然的に因果關係が在ると認めたに依るものと思はれるのである。この臆測を裏書するものとして、スミスが社會資本の各範疇を列擧するに當つて常に夫等の生産力を强調した點を擧げることが出來よう。則ち彼れは、機械器具は「勞働を容易にし且つ省略せしめる」「利潤を生ずる建造物は「職業用の一種の機械であつて、夫等の機械と同一視されることが出來る」「改良された土地は「勞働を容易にし且つ省略せしめる所の有用な機械と同一視するのが極めて至當であらう」「習得せる有用な才能は「勞働を容易にし且つ省略せしめる所の職業上の機械器具と同一視されるであらう。尤もそれには若干の

費用を要するけれども、その費用は利潤を以て償はれるのである」と述べてゐるのである。(1) 猶ほスミスは、流動資本をも一種の機械として定義しようと試み、「職業上に於ける一切の有用な機械器具は、元來流動資本の中から引き出されたものである。流動資本は之等の機械器具を製造する所の原料を給し、それを製造する勞働者の生活費を給する。且つまた之等の機械器具を、絶えず修理して長く持續せしめんがためにも亦同種類の資本則ち流動資本を必要とする。……最も有用な職業上の機械器具と雖も、その機械器具が加工する所の材料と、夫等を使用する所の勞働者の生活費を給する流動資本がなくしては、何物をも生産しえないであらう」(2) と云つてゐる。

(1) W. of N., Vol. I, PP. 264, 265.
(2) ibid, PP. 265, 266.

之等の章句に就いて見れば、スミスが勞働の生産力を增進すると同時に所得の源泉となる所の資本觀念を構成せんと試みたものだといふことが明白である。乍併彼れは才能とか貨幣とかを以て「生産手段としての資本」を濡ほしはしたけれども、所得を生ずべき物理的性質を有する所の特定物を發見しえなかつたことは自らも認むる所であつた。卽はち同じ物と雖も、その使用法に依つては所得を齎すこともあり齎らさないこともあるといふ事實を、看過しなかつたのである。例へば住宅の如きは、それに居住する人の所得には何等貢献しないけれども、若しそれを借家人に貸したならば家主にとつては所得の源泉となる。「衣服や家具も之れと同樣で、往々所得を生じそれに依つて或る

特定の人々に資本としての機能を勤める。假面舞踏會の流行する國では、一夜貸しに舞裝を貸出すことは一つの職業である。家具商は屢々一ヶ月乃至一ヶ年と限つて家具を賃貸する……[1]と明らかに述べてゐる。さればスミスは、之等の事實に徴して、彼れが生産資本の中に所得の源泉をもとめようとすることの不當を認めなければならなかつた筈なのである。然るに彼れは此の結論に達しなかつた。彼れは唯「家屋は其所有者に所得を生じそれに依つて所有者に資本たるの機能を勤めるかも知れぬが、併し社會一般に對しては何等の所得も齎らさなければ又資本たるの機能も勤めない」[2]ことを指摘したゞけで、全體の問題は之れを行詰りのまゝに遺したのである。

(1) W. of N., Vol I, PP. 263, 264.
(2) ibid, P. 263.

スミス以後の經濟學者は、此の問題に對して餘まり研究の歩を進めなかつた。ジョン・バチスト・セーは、生産理論の中に「生産の三要素」を加へたが、セー以後の學者は唯分配理論の中にも同樣の三要素(勞銀、地代、利子)を對立せしめて「生産手段としての資本」と「所得源泉としての資本」とを同一視したに過ぎなかつた。彼等は「家具商の賃貸する家具」を忘れて「資本は生産を扶助するが故に利子を生む」といふ理論としては極めて非科學的な、實際としては今日の經濟組織に迎合する所の結論を描いたのである。「生産に貢献せる割合に應じて土地・資本及び勞働へ收益を按分することは經濟の自然法則であつて、現今と同じく共産主義的國家にも當嵌まる」[1]といふ理論は、明らかに論理上の錯誤であつ

(1) Wieser, Der Naturliche Wert, 1889, S. 93.

て、土地資本勞働が生産手段として必要だといふ前提は、資本家地主勞働者に所得を齎らさねばならぬといふ結論には達しないのである。」

四

スミスの資本理論は、一言にして云へば「甚だ茫漠である」と斷定出來る。先づ彼れは、個人の資本と社會の資本とを區別したゝめに、その資本理論に著しい混雜を生んだ。彼れは個人の場合にも社會の場合にも、資本概念を常に所得の觀念と結び付けてゐるのであつて、從つて兩者の區別は今日の所謂生産財と消費財との關係ではない。卽はち彼れは、食料品の如きものも生産者の手にあるか消費者の手にあるかに從つて、或ひはこれを資本と觀、或ひはこれを非資本としたのである。されば彼れは、財と其所有者との關係を標準として資本非資本を區別したもので、此の點は個人の資本に於けると社會の資本に於けるとを問はない筈である。然るにスミスは、或る場合にはまた技術的生産の有無を以て其區別の標準とした。例へば前節に引用せる住宅の如き、それ自身何者をも生産せざるが故に社會資本の用をなさないと謂ふ、換言すれば、社會のために生産の用をなすものが社會資本だと見たのである。するとスミスが、生産者の所有する食料品、又は商人等の手にある完成品を社會資本に包括せしめたことは、不合理であるといふか混亂してゐるといふか、兎も角不徹底の譏を免れ難いのである。(1)

(1) 小泉教授、經濟學說と社會思想 P. 184 以下參照

次にスミスは、資本を固定資本と流動資本とに區別した場合にも、其間に明確な限界を缺いたゝめ矢張り所論の紛糾を招いた。

フィジオクラートは所得生成の過程を分類するに際して、資本の一部は全く年々の生産物に實現され、他の一部は唯部分的にその價格に實現されることを發見し、この相違に從つて avances annuelles と avances primitives との別を立てたのであるが（一四四頁參照）、スミスは固定資本と流動資本の別を樹てるに際し、フィジオクラート同樣の思索徑路をとりながら而かも終始之れを一貫させなかつた。

即ち彼れが機械器具建造物等を固定資本とし、勞銀原料等を流動資本となしたのは、avances annuelles と avances primitives との別を組織的に採用したものであるに拘はらず、更らに所得生成の過程に於ける外觀的乃至物質的形式に據る所の他の分類法を採用し、貨幣食料品商人の手中に在る完成品等を流動資本と看做したのである。

固定資本と流動資本とを區別するスミスの標準は、個人資本と社會資本との區別に於けると同樣、矢張り所有者そのものゝ立場を標準としたのであつた。即ち彼れに從へば固定資本とは、資本が「その使用者に所有されてゐるか又は同一形態を持續するかするの間」その使用者に所得乃至利潤を齎らす部分であり、(1) 流動資本とは「不斷に或る一つの形態をとつて彼れを去り、そして他の形態をとつて彼れに還つて來るもので、單にかゝる循環の方法則ち繼續的交

(1) W. of N., Vol I. P. 261.

換に依つてのみ彼れに利潤を提供し得るもの」(1)である。そこで彼れにとつては、種子は元來固定資本であるといふ結論に到達した。彼れは謂ふ「種子は土地と穀倉との間を往復してゐるけれども、決してその所有主を變更しない。故にそれは本來循環せざるものであり」(2)從つて固定資本である、と。

若しスミスにして終始フイジオクラートの見解を一貫したとすれば、ケネーのなした分類と同樣、種子は當然流動資本に屬すべきものであつた。スミスは此の點に於ても、所得生成の行程に於ける外觀的乃至物質的形式を脱しえなかつたのである。

之を要するにスミスは、全然別問題たる「富の生産」と「所

(1) ibid, P. 261.
(2) ibid, P. 261.

得の創造」とを同時に資本觀念に取り入れ、且つ兩者の連絡を試み、生産資本則ち彼れの所謂社會資本を採用することに依つて「習得せる才能」乃至「貨幣」等、殆んど一切の物質的非物質的財を包括する資本概念を樹立した。また「勞働者の生活資料としての資本」を解剖するに當つて生産的勞働と不生産的勞働とを論じ、技術的生産と所得構成の過程とが全然別問題であることを看過した。更に一つの資本が、その價値移轉に於て如何にして利潤を生ずるかの問題を考察するに當つても、固定資本と流動資本との間に明確な區劃を缺き、再び財の物質的循環と財の價値を再生産すべき樣式とを混交して了つたのである。

スミス以後に於ける經濟學者の資本觀は、大體に於て「生